

ありやア知らせろと言ッてくれた熊さんの親切こゝだよ、これから京橋へ駈付けて熊さんに來て貰はう、いくら贅六でも手取山でも、あの熊さんが出た以上、文句のいへる奴等ぢやアないよ、もし萬一また金こいふ事になれば、熊さんの背後に大浦の大將が控へてるからな、鬼に鐵棒だ、この鬼の鐵棒を今まで忘れて居たよ

『や、易の所謂窮して通ずるの理だ、拙者も忘れて居たよ、なぜ今まで氣が付かなんだらう、なるほご熊さん、こりや妙だ、石作さん早速く斷付けて貰はう、これから行けば夜明に來てくれるだらう、さア大丈夫、へ、へ、矢でも鐵砲でも持つて來いだ』

『それが不可よ、まだ熊さんの來ない前から、さう生り出しちやア困るよ、もし手取山が今にも』

『なアに實ア熊さんの來てくれるまで、この吊戸棚へ這入ッてるさ、つまり敵の銳鋒を避け』

て一時に盛返す戰略だ、かうなるに拙者にも、まだ智恵が残ッてるこ見えるね石作さん

石作は其まゝ飛出し、朝鮮髯は三尺の吊戸棚へ這込みつゝ、次第に闇も薄らいで、からりこ夜は明けしが、ごうした事か手取山も歸らず今かく一歩先へ飛で來る筈の石作も歸らず鬼に鐵棒の力に頼む熊さんも來てくれず、いよく夜は明けて、三尺の吊戸棚より首を差出す朝鮮髯、張子の虎の店曝しに等しく、じろく無言に四邊を見廻しぬ、

折しも真正面の破障子を音なく引開けて、ついに見馴れぬ烏打帽子の男一人、ぬツミ現はるるや否、不意を打たれし朝鮮髯、はツミ猶更ら驚いて思はず首を縮めし戸棚の前に、はや其男の聲は近づきぬ、

『おい、こら、出ろ』

『出ろこいへば出ますが、全體ごこの人です、謝辭もなく拙者の宅へ、第一また唐突に、お』

いこらこは甚だ面白からん人だ、この長屋に住で居ても外のものゝ違ひ、かりそめにも神易を以て業を致す身分ですぜ』

『文句いはずに出ろ、ぐづくするこ引卸すぞ』

『引卸す、いや、ますくけしからん事をいふ人だ、降りてよければ拙者が勝手に降りる』

『ぢやア何のために戸棚の中に隠れてるんだ、ますく怪しい奴だ』

『や、這入る理由があつて自分の戸棚へ自分の這入つてゐるのが、さういふもんで怪しい、黙つて挨拶もなく他人の家へ押上つて来る奴の方が怪しいぞ、何の用で来た』

『警察からだ』

『えッ、け、警察』

『さア出るか、出ないか、兎も角この名刺を見ろッ』

差出す姓名の上に刑事巡査の四字、一目みるや否、吊戸棚より手鞠の如く轉け落ちし襟首を其まゝ引ッ掴まれぬ、

『恐れ入ります、お、恐れ入ります、さういふ御方様は少しも存じませんで、ミシだ失禮を申上げましたが、長屋中へ御聞き下さいましたも、警察なんかへ、お伴いたす人間では御座いません、さうか石作の歸りますまで、只今、すぐに熊さんが来る筈になつて居りますから暫時、警察は甚だ拙者』

『こら静かにせい、こゝで騒いでも無効だからね、おさなく来い、もし来ないさ、ふんじばるぞ』

『まゝまゐります、まゐりますが全體、さういふ理由で拙者、かうなるんで御座います』

『うるさい奴だなちやア、搔抓んで聞かせるが、この長屋に住でる立ん坊が前夜の二時過、

上野の新坂下で汽車に跳飛されて大怪俄をしたんだ、加之も九死一生の蟲の息で、同じ長屋の八卦屋に大金を持遁しられたから、それを追ッかけて来て斯うなッたさいふんだ」朝鮮髻、俄に半泣の大聲をあげて手足を藻掻き出しぬ、

『やア拙者の一大事だ長屋中に出て貰ひたい、あの手取山め、こんだ事を吐しやアがッたよ、それがため拙者かういふ災難に出喰すんだ、これを見捨て、置かれちやア困るよ、今だ、今だ、連れて行かれるよ助けてくれッ』

朝鮮髻が生涯一度の智慧を絞ッて生涯一度の災難を仕出來し、泣きながら刑事巡査に連れ行かれし體を見るや否、第一番に飛出したは例の贅六、今さら俄に長屋中へ喚き立てぬ、

『さア事ぢや、あの阿呆ン多羅め、ごこへ納まるかと思へば、いよく警察へ納まりくさッ』

た、しかし一列の長屋中、かうなッて見れば自然の人情で、まさか此まゝにも捨て、置けンわい、平生は兎も角も鄰屋の半助はン、こりや交誼の悪い私の事でない、勿論その次の井上はン髻を生して目鏡をかけた洋服の手前でも何さか仕てやらねばならン、また向側の別嬪お六姐はンは申すまでもなく優しい女子の事、つゞいて宗立はン托鉢ばかりが能でない人を助ける出家の役目こぢやぜ、いづれも揃うて出て貰はう、わけて警察へは一夜でも止められた覺悟のある色情學者はン、是非も貴君が相談頭領になッて欲しい、や、片棒の千三屋まだ歸りおらん、さア出た〜』

これが此奴の病癖、人を呼ぶにも其まゝでは呼ばず、いちく、文句を付けて喚き散せば、長屋中、いづれも癪に觸へて面を出すものなし、

『ごうしたんぢや、出てくれンかいな、いかに人情深うても、この私一人では長屋中の義理

を背負ひ切れんぜ、さア皆、出た〜」

頻りに出た〜と喚げ、出るもの自己の外に一人もなければ、柏子ぬけの贅六、聊か案に相違して手持無沙汰のまゝ元の穴へ逆戻りの折しも、慌てゝ走せ歸る石作、此奴また長屋の入口より吐鳴込みぬ、

「占めたぜ〜、いよく熊さんが来てくれるよ朝鮮さん、朝鮮さん、さこに居るんだい」
聞くや否、贅六また再び飛出しぬ、

「やア千三屋はン、遅かつた〜」

「遅いモンか往路も歸路も一生懸命だ、この霜月に汗が出てるぞ」

「いや貴君は早からうが、かわいさうに八卦屋の身に取ては、遅かつた〜、もう熊はンでも虎はンでも後の祭禮ぢや、あかんわい」

「な〜何故だ、なぜだ」

「えらい事が出来たわい、警察へ連れて行かれた」

「えッ、警察、さうして」

「委しい事は知らんが、何でも事の原因は彼奴、あの手取山らしい鹽梅ぢや、それに付て今この私が長屋中へ相談しかけたが、さいつも此奴も不人情に一人こして出くさらんわい」
相住居の石作が歸りし聲を聞いて、流石に他の事とは違ひ、長屋中いづれも一時に立出でぬ、
中にも贅六は犬猿の半助老爺、例の鳶鼻を齧めかして總體の音頭を取り始めぬ、

「なアに石作さん、考へて見るが宜い、この長屋に躰も聾もない筈だよ、出るな言ッても出ずにやア居れねエ場合だ、ねエ皆さん、しかし飛出して騒ぐ奴が奴だから、つい汝さんの歸るまで差控へて居たんだ、さア何ミか工夫せずアなるめエ、もし眞實の親切で他より

先へ騒ぎ出したもンなら、さうなるかさしづめ、上方言葉の文句澤山で、ねちくしたところを警察へ振向けて見やうぢやアねエか、其奴のコナされ工合で凡そ見當が付くだらう」
贅六、はッ驚いて音もなく、自己が堪へ飛込みぬ、され口だけは凹垂れず音のする奴なり。

「吉原か洲崎か、女子ごもの巢でもあれば知らン事、あほらしい、警察へ探り玉に入られて堪るかい」

第一番に飛出して騒いだ贅六一人、却つて今は自己が堪に音もなく、長屋中いづれも立出て相談の眞ツ最中、久しぶりの熊さん急ぎ足に入来りぬ、

それを見るや否、石作まづ狼狽て目を剥出しながら俄の大聲、

「大變だ熊さん、大變な事が出来たよ熊さん、さう仕やう朝鮮髯が警察へ連れて行かれた、

委しい事は知れないが、やはり今朝、あらまし談した手取山といふ立ン坊が事の原因ださうだよ熊さん、かうなれば猶更ら力になつて貰ひたい、今この通り長屋中へ心配かけてる最中だ」

いづれ面倒な出来事ご承知して来た熊さんも、これは案外、あまりの不意を喰うて暫し無言のまま立寄りしが、俄に心付いて長屋中への挨拶、

「まだ初対面の方もあるやうですが、皆さん、ミシだ御厄介を掛けますよ、さうもね、あの八卦よい屋は舊時から調子外れの頓狂に出来た奴で、しかし御承知の通り根に罪も悪氣もねエ底の見透た人間ですから、な又に一時、ちよいとした災難でしやうよ、いづれまた事ご場合で、御手数も掛けますが、幸ひ昔馴染で腐れ縁の遁れねエ、わッしが引出されて来ましたから用は足りないに仕ろ、兎も角この石作ご相談の上、あらためて御挨拶を申し

ましやう、おい千三、いくら心易い長屋の方でも、たゞ立ッて騒いで暇を潰しちやア濟まねエよ、慌てず静かに内へ這入ンな」

其まゝ石作を引入れて、眉を擧めながら腕を組みし熊公、

「困るぢやアねエか、二人ながら何故、さう、いつまで相變らず恍惚過ぎるんだよ、貧乏世帯の乃公が家なら宜いが、よく物を考へて見ろ、京橋の中央で大通路に向ッた三階建築の洋館の夜の明けきらねエ薄闇に、ギン／＼戸を叩きやアがッてさ、おまけに空氣枕を押潰すやうな變な泣聲で、店の衆の手前もあらアね、仕方がねエから旦那に申し上げたんだ、ころが、あゝいふ旦那だ、有難く頂戴しろよ、わざ／＼枕頭の手箆筒へ手をお伸しなすッて、五圓紙幣二枚、さうせ金で濟む事だらうから二人へ遣れ、もし足らなきやア、あゝで足してやるぞ仰しやッたんだぞ、こん畜生、よく罰も中らねエで無事に歸れたなア」

「熊さん、何ごも申譯のないコッて、實に大將の思召、痛み入るね、ます／＼見上げた方だね」

「汝に見上げられて旦那も嘸、御本望だらうよ」

「いや眞實だよ、時に熊さん何は依置て朝鮮警の警察、さう仕やう」

「そりやア、こゝへ來て不意に喰ッた事だが、外に違ッて警察向は乃公も困るよ、少しも手加減が分らねエからな、しかし幸ひ旦那の世話になッてる辯護士で、絶えず乃公が使者に行き先があるよ、すぐ引ッ返して萬事その先生に頼んで見やう、今も長屋中へ挨拶した通り、なアに根が夢のやうな八卦よい屋だ、善い事も出來ねエが、また人並に悪い事も出來ねエ人間で、罪のある筈アねエよ、たまに半日か一日ぐらい目先の變ッた警察へ留めて置かれる方が彼奴のためだ、これに懲りて今後、ありも仕ねエ智恵なンか人に貸すめエから

な

「なるほご、さう聞けば大した心配も入らないやうだね、かわいさうに彼奴、生命を縮めるぜ」

「早く生命を縮めた方が本人の幸福だ、あんな工合ぢやアいつまで長生したって無効だよ」

「しかし熊さん、縮める生命は外で縮めてやりたいよ、警察で縮めちやア少々むごいよ」

「や、それも、さうだな、ぢやア直接、これから引ッ返して辯護士の先生に頼んでやろう、

汝も同伴に来るが宜い、また何かの用があるだらう」

「行くとも、無論、行くよ、ここで熊さん、大將の下すつた五圓紙幣二枚は、さうなるん

だ、かうなつたのも實ア金の間違から起つた理由だからね、早く安心をさして貰ひたい」

「いやな奴だなア、黙ッてる、相手は熊さんだぜ、二人を揃へた上に渡してやるんだい」

一度は八軒長屋の九尺一間に陣を引て寄せ来る敵を防ぎしが、其まゝ兎も脱がず軍門にも降らず、天晴れ再舉の商旗を翻へして今また京橋の中央に清韓貿易の大浦商會、巍然として峙ちぬ、家は鐵骨石皮の洋館、巍然として立ちし奥の一室に主人の大浦卓三、ますく肥太りて二十貫以上の大兵肥満、のツしりこ相變らず大胡坐を組めば、閩越の熊公また相變らず青竹を割つた如き男なり、

「さうした、ギンな事だツたい」

「いや、さうも斯うも、お談話になつた奴等ぢやア御座いませんよ、借りる奴も借りる奴に

出来て居りますが、あの八卦よい屋が貴君、人に智恵を貸しましたさいふ理由で」

「ハ、ハ、こりやア面白い、さうしても間違の起る筈だ、加之も飛で來たのが千三の石作、

猶更ら妙だ、ハ、ハ、全體、さいふ人間が借りたんだい」

『ごうせ貴君、ろくな奴ぢやア御座いませんよ、實ア其後あの長屋も段々こ入れ變りまして、いろんな化物が居ります中に、田舎相撲の果て手取山こかいふ立ん坊、此奴が借り主で、東京中の新聞屋を相手に五百圓を取るの、いや七百圓になるんだか、ハ、ハ、ハ、夢にも見られない馬鹿けた事から貴君』

『八卦屋め、大變な智恵を貸出したもんだな、ハ、ハ、ハ、』

『あまり馬鹿氣きッて委しい事は申上げませんが、つまり間違の起るやうに出来た事が、首尾よく間違ッた理由で御座いますから、別に不思議も何もない筈が、この立ん坊め、ミシだ本氣の沙汰で、わざ／＼夜の夜半に八卦よい屋を上野へ探しに出たこいふ騒動、加之も狼狽て新坂下の汽車に跳飛されこかいふ大怪俄、まるで段取が嘘のやうちやア御座います、かわいさうに貴君、立ん坊の怪俄は眞實の九死一生で』

『む、さうかい、八卦屋の智恵も侮れない、案外そりやア大事だな』

『ミシころが貴君、その立ん坊め、蟲の息で、あの八卦屋に大金を持遁しられたこ言ッたのが、また間違の種になッて八卦よい屋の警察へ引かれたこいふ間違、最初から最終まで間違だらけで持切りましたが、怪俄ミ警察は双方、二人も間違はずに、やらかしましてね、捨てるも置けませんから、甚だ勝手がましう恐れ入りますが幸ひ、お出入の黒川さんに兎も角、お願ひ申しまして』

『よく氣が付た、黒川が警察へ出たんだな、さういふ工合だッたい』

『ハ、ハ、ハ、せめて人間相應に五錢か十錢かいへば面倒ですが、彼奴等が東京中の新聞屋を相手に五百圓か七百圓かいふ大金の持遁で御座いますから、警察の方でも笑ッたまま八卦よい屋を吐り飛して、すぐに濟ださうで御座いますが、濟まないのは立ん坊の災難』

で、逆も助かるまいこいふ事で御座います」

「そいつア大變だ、乃公の知らない立ん坊だが、乃公の居った長屋で乃公の知った八卦屋から、さうなつたさすれば、まさか聞捨にもなるまい、たゞ氣の毒ぢやア心持が悪い、さうせ療治は養育院か警察に關した病院ですらうが、せめて息のあるうちに自由に喰ひた

いものを喰はしてやりたいね、兎も角も三十圓ばかり持つて往つてやれ」

「畜生め、ミンでもねエ智恵を出しやアがったぜ、いや、實ア今朝、戴きました五圓紙幣二枚、彼奴等二人に遣らす黒川さんへ、お渡し申しまして、早速立ん坊の方へ遣はしました

が」

「そりやア氣轉だつたな、しかし三十圓また遣るが宜い、あらためて石作にも八卦屋にも五圓づゝ遣り直ささ、あれ等に怪俄アないが驚いて青くなつたらう、ちよいこした事にも二

人ながら揃つて、よく腰を抜かした人間だからね、ハ、ハ、ハ、」

「なアに今朝の五圓づゝを遣らない代りに二人の横ツ面、いやこいふほご張飛してやりまし

たから、もう差引は付いて居る筈で御座います」

病人か狂人か犯罪人でない以上、無事に達者な人間が何處を歩いても彷徨しても差支なければ、青天白日の下に朝鮮髻石作が連立つて、ひよこく、京橋の中央を歩み行く風情、いご猶

更ら青く細く物の哀れに目立ちて、おもはず往來の人に振返られぬ、

それも其筈なり、蝙蝠の如く夕暮の八軒長屋を飛出して淺草の宵闇に多年の臙臙たる八卦よ

い屋ご、あまり眞生面より日の照らぬ場末の横町か裏道ばかりに蚊の脛を飛して歩く千三屋、

いはゞ浮世に用のない亡者二人が相伴うて頻りに何をか私語きながら、電車に驚ろき人車に

狼狽へて、織るが如き人間に追廻されつゝ、きよろゝゝ前後に遁け廻る體、畫にも描けざる圖なり、

なるほご兼好法師の名言、見苦しからぬものは塵塚の塵ご、やはり此奴等は住むべきころに住むべき奴、うかゝ人間捨場所を出るべき奴でなし、

されご本人みづから人間の屑ごも思はねば、この京橋の中央を白晝に彷徨て、さのみ見苦しからぬ心得、

『ねエ石作さん、二人かう揃つて、わざゝお禮に行くんだから、大浦の大將も定めて喜ばれるぞ、いかにも義理の固い人間だと思つてね』

『そりやア、さうごも、同じ長屋に住で心易くした我々二人は大將ご親類も同じ理由だが、あの手取山ア無縁の他人さ、その顔も知らない手取山へ、いくら不意の炎難だつて大金を

下さる筈アないよ、やはり我々二人から事の起つた間違で、こゝを今かうして置いてやれば行末また何かの力になる頼母しい我々ご思つて居らつしやるからだよ、すれば猶更ら、いよいよ義理を固くして厚く、お禮を陳べないぢやア濟まない、大將居てくれれば宜いがね
エ』

『もし御不在なら、お歸宅まで待たうぢやないか、や、乃公の歸るまで待つて居てくれたかご、いよく満足に思はれるぜ、全體、ごこだよ』

『そこだ、そら、その三階の西洋建築で金文字の看板が出てるよ、清韓貿易商、大浦商會、ね』

『なアるほご、立派だなア、いかにも、眩しいやうだ、それに付けても石作さん世の中ア、心弱く無常を感じるもんでないね、いくら喰へない時があつても、お互に今後、もう死ぬ

氣は出すまいぜ、さう見たッて、誰が考へたッて、こまの御主人が、あの長屋へ落込で居たと思へるかね』

『眞實だ、あまり正直過ぎて同じ穴にばかり小さくなッてるから、貧乏神め、好い氣になりやアがッて我々を馬鹿にするんだよ、をりくくかういふ工合に方角の違ッた場所へ出て氣を取直すんだね、現に今日だッて吾妻橋を渡るまでは貧乏神め、うかく平生の心得で付いて來やアがッたが、不意に斯ういふ立派な西洋館へ這入るんから、面くらッて、さうかなッたかも知れないぜ』

『さういふ石作さん、氣の故か拙者の身體も何もなく力づいて、そろく歩の運びが輕くなッたやうだ、また吾妻橋を渡ッて待受ける貧乏神に取ッ付かれちやア大變だ、歸る時は兩國を渡ッて少し通路は遠いが、本所の搦手から柳島邊で一息を入れた後、そッさね、

音のしないやう藻潜込まうぢやないか』

『おいく朝鮮さん、行過ぎるよ、こまだよ、こまだよ』

『心得た、拙者まづ案内を乞はう』

自己が分相應の八軒長屋に住めばこそ、さのみ目立たぬ朝鮮髻石作が打揃うて、雨でも降る事か、わけて其日は天氣快晴に最も業務の繁忙を極めし午前十時ごろ、京橋の中央に巍然たる大浦商會の眞正面より、店頭へ乗捨てたる俵自轉車の間を縫ひながら、ひよこくく歩み入りし體、黒死病か肺病のバチルスに似たり、

もし熊さんに出喰せば物もいはず横面を張飛さるゝ奴ながら、折しも幸ひ、主人の大浦卓三が目早く見付けて、乞食間違へし店員を制しなから四邊かまはぬ例の洒々落々、大口を開けて高く笑ひぬ、

「ハ、ハ、ハ、やッて来たね」

かゝる時には自己の身も顧みず時三場合に恐れ氣もなく、石作を掻き退けて出酒張る八卦よい屋、十餘年來こゝに持傳へし黒の山高帽子を脱いで、ほしやくの朝鮮髻を捻りながら、いかにも仔細らしき顔色、

「これは大將、久しく御意を得ません其後ますます御繁昌で、相變らず御壯健の體を拜し奉つり、高田幸運齋、忝しく謹んで御祝辭を申し上げます、また過日は、これなる石作、ミンでもない事で不意に罷り出まして、いやはや、何とも恥入った次第、それがため今日、かく兩人うち揃ひ改めて御挨拶に、御禮かたぐい伺ひました義で」

浅草の背闇に出る口上めいて饒舌り立つれば、石作また負けぬ氣に貧乏首を突出しながら、ごうしても此奴は千三屋の週旋口調なり、

「奥様も其後、別扱お變りなく居らせられまじやうが、お妹御さま、いかゞ遊ばしました、定めて何處へか、もう御目出たい御相談の出來ます御芳紀で、もし萬一まだで御坐いますれば幸ひ石作、さる筋目の宜しい御大家より兼々お依頼を受けて居りますから」

流石の大浦卓三も、白晝の店頭、この兩人に攻め込まれて、始めは面白く笑ひしが今は聊か持餘せし體、満面を皺めながら俄に振り返りぬ、

「おい、誰か奥へ往つて外套紙入を持って来い、これから此二人を連れて晝飯を食に行くからね、まア宜い黙ッて居れ、乃公が連れて行くんだよ、熊は不在か、ぢやア俵は入らない歩いて行かう、いつもの料理屋だぞ、もし用がありやア電話をかけるよ」

聞くや否、朝鮮髻、はツミ急に一步を後方へ退きながら、ますます以て仔細めきぬ、

「や、大將、それでは恐れ入ります、今日は只お禮に伺ひましたばかりでねエ、石作さん、

御辭退を申さないかね、ミツかへ連れて行くこ仰しやるよ』

『眞實で御坐います、この御繁忙の中を私ども、ごう致しまして、また伺ひますこも今日の
ごころは一まづ、お暇を、いづれ近日』

さうかこいへば、それで其まゝ無事に歸らぬ奴、また近日、のこく來られては猶更ら蒼繩
い奴等こ、大浦卓三、急いで店頭を立出でぬ、

『さア二人こも、そこに立つて居ては却てツ困る、ついて來るが宜い、久しぶりで奢らう、
ハ、昔馴染が尋ねて來てくれたンだからなア』

二人の饒鬼亡者、ひよこくもまたもや動き出しぬ、

『石作さん、痛み入るね、これだから拙者、心得て居ながら、わざこ平生は御無汰汰するン
だよ』

『しかし折角の思召を無にしては、相濟まん理由だよ』

『なるほご、それも、さうだなア、それぢやお伴しやうかね』

『殊更ら御馳走を下さるご思ッては失禮だから、つまり御晝食の御相手に我々がお伴するン
だよ』

『いかにも、さうだね』

大浦卓三、歩みながら振り返りぬ、

『おいこ喧ましいね、往來だ、黙ッて歩けないか』

流しの 義大夫 三十二	中割りの 牛助 五十三	職工 井上進 二十九	朝鮮同居 石朝作 四十八 五十七
たほ め	隠雪總	籠	
富田副大 田原 三郎 三十一	宗 拓鉄坊主 五十三	か し を	か み か き 四十六

腰かけの一膳飯屋でさへ、近來は満足に腹を肥した事のない奴が、大浦卓三のため柳橋の料理屋へ連込まれて、向河岸を見渡す川添の裏坐敷に通され、身も埋まるばかりの絹の坐蒲團

に上せられ、山海の珍味を眼前に並べられた石作の朝鮮髻、生捕られたる貧乏神の如し、

「ねエ石作さん、只お手軽く、ちよいと御晝食の御伴をする筈だったに、案外、かういふ結構な御馳走に預かる事は、夢にも存じよらん事で、實に恐縮の至極だよ、いッそ此ま御辭退を申し上げやうか、あまり冥加に餘ッて拙者、この後の運が恐ろしいよ」

「なるほご、一應は道理な次第だが、さういふ遠慮は却ッて失禮に當るよ、第一お厭ひのある方なら時々場合で此ま御辭退も出来るが、折角かうして、下すッた御馳走を、みすみす箸も付けずに引退ッちやア大將の思召を無にする理由だ、猶更ら相濟まないよ、お互に後の運は兎も角、現在この眼前の運を早速く素直に戴かうちアないか」

「や、その邊の事も拙者、心得ないではないがね、易に曰く」

「吐ッ、吐ッ、こゝで淺草を出しては不可よ」

床柱に背を持たせし大浦卓三、思はず天井を仰いでの高笑ひ、

「ハ、ハ、ハ、神易も淺草も儲けて、まア早く箸を盃を兩手に持つが宜い、もう正午を過ぎたよ、

しかし急ぐには及ばないぜ、別に用のある身體でも無からうから、ゆるく落著て、うん

み食べて、うんみ飲で、昔もった杵柄、面白く秘し藝でも見たいもんだねハ、ハ、ハ、

「ますく、恐れ入るね石作さん、さう仕やう、やはり戴かうか」

「有難く頂戴するより外に、我々の身分にして、さう仕やうがあるかね」

「いかにも、ぢやア大將へ拙者まづ御盃を獻じやうかね、但し君から差上げるかね、而して

後お流れを受けるのが、かういふ席の禮だよ石作さん」

大浦卓三、片手を宙に打振りながら、自己が前の盃に片手の獨酌

「なアに構はず、此方は勝手にするから二人は二人で飲むさ、實はね、わざと女中さにも來

ないやう、手を鳴らすまで避けさしてあるんだ、その代り今に酌する女は女で三四人、來

る筈だが、さうしたか、遅いね、ハ、ハ、ハ、

折しも廊下を摺り來る優しき足音、すつと隔ての障子を開けて、すらり三時ならぬ花の顔を

並べしは、土地に名を得たる選抜の藝妓五人、みるや否、大浦卓三いよく興に入りぬ、

「やア人殺しども、揃つて來たな、さア這入れ、今日の御客様は此二人だせ、腕に糾をかけ

て御待遇しろよ、しかし乃公の目を忍んで變な處へ不埒な糾をかけ過ぎるこ此女等、承知

しないぞ、たゞ岡惚ぐらるなら平生の馴染甲斐だ、大目に見逃してやるがね、ハ、ハ、ハ、

おもはず振返りし朝鮮髻石作、はつと驚く途端に、つるり絹の坐蒲團より迂り落ちて、

あはれや半泣の瘡ッ面、一種の悲鳴をあけぬ、

「たゞ大將、これから我々二人は全體、なるんで御坐います、石作さん氣を確實に持つ

てくれないと困るよ』

柳橋で第一の料理屋に連込まれ、生れて始めての珍味佳肴に埋められ、あつと驚く眞正面よ
り、さア喰へ、さア飲めと大浦卓三に責付けられ、加之も土地の名物藝妓五人、前後左右を
取巻かれ、あらまア此お髻の可愛い事引ッ張られ、おや此お方は俳優に似てるよと捻
り廻されて、有難いやら苦しいやら實は夢が夢中の石作と朝鮮髻、されど此奴等この中で箸
と盃は手を放さず、泣きながら食ひ逃げながら飲む體、いはど生命がけの御馳走、地獄と極
樂の境目に追込まれし餓鬼の如し、

午後の一時過より其日の暮るゝまで、凡そ半日の間、息を次ぐ間もなく酒を浴せられ肴を詰
込まれ女に引ッ張廻されて、綿の如く柔潰され泥の如く酔潰され、もはや手足も叶はず身體
も動けず目も見えず口も聞けず、たゞさへ人間一正に足らぬ奴が猶更ら四支五官の作用を失
ひ、其まゝ其處に倒れて死人の如くなりぬ、

夜更け人定りて後、なほ朦朧たる夢うつゝの心地ながら、やうく我に返りて目を見開けば、
八軒長屋の塙でもなく、行倒れし往來の路傍でもなく、數奇を極めし一室に白晝を欺く電燈
の下、眩ゆく光る金無地の二枚折に立圍まれ、瓦を錦繡に包みし如く身は絹夜具に埋もれて、
おもはず咽喉の乾きし枕頭に醒醒の水あり、あたり聞こして音なく、そつと自己が面の皮を
捻れて正しく痛い朝鮮髻、恐るゝ首を上げれば、我と並びし石作また首を上げて、じろじ
ろ訝かし氣に此方を打守りぬ、

『石作さん、おい石作さん、たしかに石作さんだらうね』

『さうだよ、石作だよ』

『全體こゝは何處だね』

『さア、何處だらう』

『拙者、つらく考へるに、こりやア尋常事でないぜ、大浦の大將に連れられて、柳橋の料理屋で、さんざ御馳走になつたまでは覚えてるが、その後の事、さつぱり分らんよ、ねエ石作さん、もし狐狸に遣られてるんぢやなからうか』

『なアに折を提げて出た覺はないから、大丈夫、狐狸の業ぢやないよ、つまり勘うだね、あの料理屋で前後めちやくに酔潰れて仕舞つた二人の身骨を、大將また例の悪洒落で面白分に、ぎツか近處の待合へでも運び込んだらう、そこは流石に石作、これでも昔の若旦那だ、あの場合、あんな工合にされた段取から、この室内の様子を見るに萬事の體裁がきツこ待合に相違ないよ、嗚呼、思ひ出せば朝鮮さん、小三十年にもなるがね、絶えず毎

夜、かういふ衣具で枕屏風に朝日も知らず寢過ぎた罰が中ツて、今あゝいふ長屋に四年越の膝小僧を抱寢の境涯だ、落ちも落ちたり、察して貰ひたいね、實ア今日の晝間、五人のうち年輩二十二三の意氣な藝妓で、きりッッの道具の緊ツた、江戸裙を曳て居た女ね、よく肖てるぜ、その頃この石作を追ひ廻して、殺すこか生すこか騒いだ女にさ、ありし昔が猶更ら思ひ出すよ』

『おい、石作さん、小三十年も昔の事で變な氣になられては困るよ、お互に今は今だ、さう考へても、これぢやア、あまり一時に運が向き過ぎてるぜ、此まゝ夜が明けて我々、さうかなりやア仕ないかね、もし大將が此家に宿つて居ないこすれば、少々うす氣味が悪いよ、かうなるこ拙者、よほご君より正直だからね』

『いくら正直だつて朝鮮さん、まさか今夜こゝの勘定を拂へる的是無からう、第一また此家

が黙ッて我々二人を宿める筈はないよ、居るに仕る居ないに仕る萬事は大將の受持さ、つ
まらない心配したッて今更ら、さうなるもんかね』

『なるほご、いかにも、さうだね、や、いよ／＼さう極ッた以上、一夜でも大名になッた
氣だ、さうだい石作さん、手を鳴して見やうぢやないか、ギンな奴が出て来るか、いづれ
女だぜ』

『ギンだ正直だね、もし女が來たら、さうする心算だよ』

『女も女によりけりさ、もし女らしい女が來て何さかいへば、拙者また其場の成行で、さう
こともなッてやるよ、晝間も拙者の髻を引ッ張ッて藝妓もが嬉しさうに、あらまア可愛ら
しい事言ッたぜ、しかし左右から寄ッて來て一時に五六本も引ッ抜かれた時は、痛かつ
たね、ひり／＼したよ、だが女さいふもの、ふしぎに腹の立たないもんだね、ハ、ハ、ハ、』

『それで此方の小三十年さ差引が濟ンだぜ、ハ、ハ、ハ、』

『眞實だ、さうで石作さん、腹さんざ食ふものは食ッたし飲むものは飲だし、其まア酔ッ
て前後も知らず、ふご目を開て見れば、この座敷で此絹夜具に包まれた工合、堪らないね、
宜い心持だね、さう考へても拙者、いよく貧乏は嫌になッたよ、夜が明けて、また元の
巢へ歸るかと思へば、なさけないよ』

『いくら此方が嫌になッても貧乏の方で嫌になッてくれないから困るよ、なさけなくッても、
元の古巢へ歸らなきやア何處へ歸るんだ、いつまで此まア此家に居れるかね』

『時に石作さん、何か生命に別條のない毒は無からうか、たごひ拙者、少々の苦しい病人に
なッても此まア五六日こゝに寝て居たいよ、起きて達者に元の巢へ歸りたくないよ、實ア
平生に食馴れないものを一時に押込んで食ッたから、腹の痛め俄に驚いて、さうかなるか』

「ご思ッて居たに、かう無事で心持が宜くツちやア聊か手違ひだ」

「ちやア二人も揃ッて、夜の曉方に虚病でも起さうか」

「いや不可、悪洒落は仕ても根に親切氣のある大將、すぐに醫者を呼ぶから無効だよ」

「おい朝鮮さん、ぐづく言ッてる間に夜が明けて來たぜ、そら、鴉の啼聲が聞え出したよ」

「いよく啼出しやアがツたね、加之も今朝ア、いやに大きい聲だ、せめて石作さん、あれ

を戀の怨恨にでも聞きたいもんだなア」

たごひ病煩ッても此まゝこゝに寢て居たい、のこゝ起きて違者に歸りたくないといへば、

此まゝこゝには居れぬ奴、置けぬ奴、いよく元の古巢へ逆戻りの運命に迫られて、からり

と夜は明け放れぬ、

されど大浦卓三が萬事一切の引受に、わけて多年の恩顧を蒙る待合家業、いやゝながら流

石また乞食待遇もせられず、つまりは襤褸に包んだ金ご思ふて、まづ朝の膳部に迎ひ酒を出

せば、石作ご朝鮮髻ご二人、これぞ現世の食ひ終め飲み終め、もはや生きて再び來られぬご

ころご心得、恥辱も外聞もなく目を白黒にして腹の皮の裂けるまで詰込みぬ、

給仕の女は始めの義理一片に運びしだけの事、飯も酒も其まゝ其處に置いて遁出せば四邊に人

なき僥倖の二人、そツご互に聲を潜めぬ、

「朝鮮さん、ごうだい、もう這入らないかね、みすくまだ御馳走か、この通り残ッてるぜ」

「や、残念ながら、いけないよ、もう拙者この上は堪忍にも詰込めないよ、實ア苦しいよ」

「苦しい、しかし歩けるだらう」

「慌てゝ歩けば出るかも知れないが、なアに、そツご動けば、ごうか斯うか動けさうだよ」

「折角、食ッたものを慌てゝ出すには及ばないよ、なるべく腹に響かないやうに五體を曲に

浮かして、ふわ／＼と歩けば宜いから、もう少し詰込めないか、餓死はあるが食過ぎて死だ
奴ア、あまり聞かないからね」

「いや随分、死物狂ひで詰込だがね、なるほご現在これを此まゝ見残して行くなア心外だ、

第一また勿體ないよ、折を貰はうか」

「無効だ、さう思ッたか女中め先刻、小さな聲で問はず語りに、朝ッばらから折は出しませ
ンと吐したぜ」

「けしからん女だな、この我々を見くびつて先を越しやアがッたんだよ、さう吐せば意地だ、

汁氣のないものア一切その漬菜まで袂へ入れてやらうか」

「意地でなくツても捨て置けない、汁氣があツても手で絞れば大丈夫だ、猫が舐めたやう
に入れて仕舞へ、入れたり入れたたり、さア早く」

「心得た、寶の山だ、手を空うして歸れるか、石作さん、この漬菜は本場の三河島だぜ、う

まいよ、ついでに盃も入れてやれ、一個、幾何するだらう、皿も二三枚、差支なからうね」

「文句をいはずに、黙ッて、黙ッて、無言の早業に限るよ」

折しも障子越し顔も出さぬ女中の聲、

「お俵が二臺まゐりましたよ、もう九時で御座いますよ、お急ぎ立て申す理由では御座いま

センが、手前ども毎日十時から掃除を致しますので、いづれ其うちまた、御ゆるりご、こ

れを御縁に相變らず、さうか御最負を願ひます、お邸宅は本所の業平町ださうで御座いま

すね二」

何ごいはれても笑はれても、もはや、食ふだけ食ひ飲むだけ飲で、餘ッた食物は二人の袂へ
詰込だ朝鮮髻と石作、俵二臺と聞いて此奴また俄に元氣付きぬ、

『朝鮮さん、俾が來てるいよ』

『有難いね、ここの女奴ア癩に障るが大將の思召は行届いたもんだ』

生來ここに始めての華奢全盛、空前絶後の御馳走に逢ひしが、おはれや權花一朝の夢さめて、また元の古巢に立歸りし石作ミ朝鮮髻、ほッミ思はず溜息を漏しながら、たゞ茫として氣脱の如くなりぬ、

『石作さん、有難いは有難かつたが、これちやア極樂ミ地獄の變り目が、あまり際立ッて早過ぎるぢやアないか、加之も娛樂は僅か一晝夜で、これから前途の月日が長いからなア』
『眞實だ、めぐる浮世の小車いふが、かう榮枯盛衰の理が眼前に来てくれちやア、却ッて後が苦しいよ、いくら小車だッても少し朝鮮さん、ゆるくミ廻ッてくれさうなもんだね』

『しかし石作さん、その一晝夜が、何とも、かこも、いへなかつたぜ、今更ら急に氣の付いた理由でもないが、何故こんな長屋へ住んだらう、見れば見るほぎ、うす汚い家だなア』
『だから後が困るんだよ、あの御馳走の味ミ藝妓の愛嬌ミ絹夜具の寢心地を、すツかり忘れきるまでは朝鮮さん、お互に猶更ら苦しいぜ』

『をりく夢にでも見て、くりかへしたいもんだね』

『藝妓に酌をさして心持よく酔ツた邊だけなら宜いが、あの勘定を此方に取りに來られてきゆうく責抜かれる夢なんかア感心しないよ』

『いや石作さん、それでも結構だ、實ア拙者、この年齢になるが、いつも立食の現金拂ひで藝妓や料理屋の勘定を後から取りに來られた覺えがないよ、ギンな氣持か一度、見たいねハ、ハ、ハ、』

折しも不意に飛込來りしは例の熊さん、目を怒らして吐鳴立てぬ、

『おや、此奴等、罰も當らねエで無事に戻つてるな、生憎この乃公が居なかつたから仕方もあるが、何故また來るなら來るで、そつこ乃公を尋ねて來ねんだ、のこくこ晝日中お店の眞正面へ二人も揃つて畜生、おまけに旦那が蒼蠅く思召して連れて出りやア、好い氣になつて、時も場處も考へねエ奴等だ、さんざ瘦つ腹へ喰ひ酔つて、へどれけになつた上また待合で宿り込だこいふぢやアねエか、よくまア其状態で、づうくしく寝やアがツたな、え、おい、旦那ア笑ひながら面白いと仰しやるが、後で聞た乃公ア店の衆の手前、さんなに辛いと思つてるい、穴へでも這入りたかつたぞ畜生、うぬが分際も考へずに、ふざけ過ぎた奴等だ、立ん坊の一件で迷惑をかけて、まだ七日も立たねエぢやアねエか』
二人も今更ら一縮みに縮み上りて、青くなりながら石作まづ口を出しぬ、

『くく熊さん、熊さん、實に相濟まん理由だ、決して熊さん、さういふ量見でないが、おい

おい朝鮮さん、こゝで何さかいはないかね』

朝鮮髯また俄に狼狽出しぬ、

『なるほご、熊さんのいふところ、いかにも道理だ、なるほご、こりやア我々に於て一言ないよ』

熊公、怒りながらも心に優しい男、はツミ壁越に氣が付いて聲を潜めぬ、

『なるほごくつて、何が道理だい、實ア今、別に旦那の用があつたから其待合へ寄つて來たんだぞ、するま家中の大評判だ、今朝の迎ひ酒も宜いが、食餘りの雜物も同時に皿や小鉢まで袂へ入れて歸つたこいふぢやアねエか、この盜賊め、さア出せ』

『出すよ、出すよ、拙者の分は明白に出すが、石作さん君の分も吐出さないかね、拙者一人

のやうに思はれては甚だ人體に關はるよ』

めくら蛇に怯ぢず、いかなる人間に對うても、痛い目するまでは屁理窟を並べ出す奴なれど、

この熊さんに怒られては忽ち青菜に鹽の石作ご朝鮮髻、ぐうの音も出さぬ凹垂れぬ、

熊公、壁越の隣屋に憚りながら、さらに胡坐の膝を叩いて目を剝出しぬ、

『揃ひも揃つた奴等だぜ、え、さのみ惡氣も無からうが、をりく／＼ミンでもねエ横著氣を出

しやアがつて、また罪も智恵もないくせに慾があるから猶更ら困るんだ、考へて見ろ、料

理屋や待合の皿小鉢を袂へ入れてね、それが其時の洒落で濟む人ア別にあるんだ、飢饉年

の半亡者を引摺出したやうな薄汚ねエ瘦ツこけた貧乏面で、盜賊の外、何云解が立つん

だい、よくまア、づう／＼しく大膽に、こんな大きい皿を盗んで來やアがつたな、餘計な

事に小器用な奴等だ』

『だから熊さん、二人も悪かつたよ、この通り謝つてるよ、この通り預つて來た品物を正
直に出してちやアないかねエ石作さん』

『さうか熊さん、かういふ事は熊さんだけに仕て貰つて、大將へは内々に』

『ハ、ハ、まだ口の減らねエ、預つて來たご吐すよ、誰が汝に預けた、何が正直だ第一また

大將へ内々いふが、乃公より大將の方が先へ御存じだぞ、歸るご直接、待合から笑ひ半

分に電話が掛つてらい畜生』

『や、これは大變、大將に知れたかね、さう仕やう石作さん、二人も折角の信用が無くな

るよ』

『信用、おい／＼、おい、乃公の前だから宜いが、も少し自己の分際ご相手の御人品を見て
物をいふもんだ、二人も折角の信用が無くなるツて、なくなる信用が二人も、ある量

見か、またあの大将が汝達に全體、さういふ理由で何を御信用なさるんだ、實は今日、汝達の身を取て夢のやうな幸福を持つて来てやツたんだが、さういふ量見て居やアがツちやア、この公乃が大将へ濟まねエから、ネツミ此まま持つて歸ツて、キツぱり御謝絶をして仕舞はう』

『えッ、熊さん、二人の身に取つて夢のやうな幸福、くく熊さん、後生だよ熊さん持つて歸らずに置いて往ツて貰ひたい、せめて半分だけ、あこで兩斷にするよ』

『ぢやア以後、もし今のやうな量見て居やアがるこ承知しねエぞ、まア兎も角も京橋の方を向いて有難く拜め、冥加に餘ツた奴等だけ、實ア斯うた、近頃大森へ大将の御別荘が出来たんだ、ね、ミころで汝達二人を、さう思召したか、可哀さうだから、その別荘へ置いてやらうミ仰しやるんだ、つまり食ツて著せて廣々とした立派な新建築の別荘で飼殺しに仕て

やらうミ仰しやるんだ、暇に明して庭の草でも撈りやア宜いんだ、その代り二人へ言渡す事があるぜ、まづ汝は其ほしやく、髯を剃ツて仕舞ツて今後一切、ミんな事があツても易に曰くを持出さない條件付だ、また汝は今後一切、誰に向ツても彼是めいた千三口調を出さないさういふ條件付だ、二人もさうだ』

聞くや否、石作と朝鮮髯の二人、もはや物も言はず、たゞ啞の如く黙ツて兩手を合しぬ、



あはれや立ん坊の手取山は、八卦よい屋の智恵を借りしがため、汽車に跳飛されて九死一生の大怪俄、何の因果か元の古巢にも戻り得ず、せめて大浦卓三より餘所ながら贈られし金を

現世の見終めに、いよく三日目の曉の鐘を現世の聴き終めに、其まゝ出る息を引取りしが、それ以来の石作三朝鮮髻は此奴また案外の幸福、夢のやうな事が引續きしのみか、種の善い狛ころの如く大森の別荘へ飼殺しは、やはり正直一途の熊さん、縁を繋ぎし滾れ僥倖、二人おもはず互に顔を見合して、あまりの嬉しさに双方より頬ツ邊へ喰ひ付きぬ、そもく八軒長屋の開闢以來、いつも何事によらず飛出して仕損つた此二人が、いよくここに最後の運を拾うて目出たく人間の捨場所を這出しぬ、

朝鮮髻三石作を送る文

浪六こゝに謹で滿腔の熱誠を捧けつゝ八卦屋君三三屋君を送る、

そもく兩君の出處經歷、いかなる父母の系統より生れて、いかなる世間の風波に流れ

來りしか知らねど、この本所の業平町に八軒長屋の建設以來、今日に至るまで四年越の御苦勞千萬、殆ど感謝の辭なきに苦しむ、

夜なく、淺草の宵闇に神易の弓張提灯を照し、日々いづこへか蚊の脛を飛してのなき家庫地面の周旋に駆廻り、歸れば忽ち一蓮托生の徒輩に接して、いつも頭の上りし事なく、或は不意の喧嘩を仕かけられ、或は無實の冤罪を蒙り、或は糞子の如く窘められ、或は穢多の如く侮られ、さらぬも痛々しき瘦ツ面を無遠慮に引ツ搔かれし事あり、おもはず二人抱合うて腰を抜かすほどの目に逢ひし事あり、されど兩君の無邪氣にして至極お人よしに出来たる工合、敢てこれを根に持たず、また直ぐに忘れて其相手に翻弄されながら、ますます本氣の沙汰に出酒張つて黄色の大聲を振立てつゝ常に八軒長屋を賑はし來りし頓狂さ、實に一日も缺くべからざる名物なり、

その名物として久しく馴染の深かりし兩君が今や將に去らむとす、情緒纏綿、うたゝ離別の涙に堪へざれど、こゝに此まゝ引止めて置いては餓死さすより外に藝のない兩君、その最後を見るに忍びず、殊更ら惜しき名残を割いて無理に其首途を嬉び送る、別れに臨み送るに際して、ちよいと何をがな錢別に差上げむと存せしが、別段これいふ品物もなければ、この事のあるを豫期せし一日前、だしぬけに柳橋の酒池肉林、また藝妓まで添へての御馳走、あれは實のこころ大浦氏の奢にあらず、豫てより兩君の勞を多ごせる浪六の奢なり、

あゝ今日まで浪六のため八軒長屋に盡くされたる八卦屋君と千三屋君、今後の兩君に望すべき一の婆心あり、願くば一時に安心し過ぎて病氣となる勿れ、また一時に食過ぎて頓死する勿れ、なるべく身を大切に養生して、幸に天の壽命を保ち自然の往生を遂げし

後は浪六その墓を營み其碑に銘すべし、著て食ふに困らず死して墓の約束まで出来るまでは、おもひの外に兩君また晩年の幸運ならずや、

浪

六

八卦屋君

千三屋君

八卦よい屋の朝鮮髻三千三屋の石作、こゝに此文を得て猶更の拵舞雀躍、いよく跳返りながら八軒長屋を立出でつゝ、大森の別荘へ飼殺されに行きぬ、

糞帝の蛆蟲一般、なくて叶はぬ自然の約束に生れて、この八軒長屋に生涯の運命を托せし

筭の石作朝鮮髻が、案外の浮世へ拾ひ取られしに聞くや否、實は負惜み羨ましきの欄檻まぎれに黙って居れぬ贅六太夫、第一番に喚き散しぬ、

「さア、おかしな事が出来たぞ、この長屋で床板の腐るのが早い、人間の干物になるのが早いかと思つて居たに、床板の腐らうちに彼奴等二人、無事に生きて出おつたわい、しかし考へて見るに、こりや間違ぢや、あのまゝ二人も干物になつてこそ、書畫骨董に飽きた世の中の好奇心な奴が、別荘の置物にもするであらうが、全體あの二人、ひよこく、生きて居て何處に面白味も價值もあるもんかいな、かわいさうに彼奴等、福の神に拾はれた氣で滅多無性に躍りながら出て行きおつたが、事に依るに生肝を抜かれるかや、やはり人間は人間相應、この長屋で尋常に餓死でも仕くされば我々も、死後仕末を付けてやつたに、なア半助はン、おツミ禁物ぢや、そ

奴も不在かい、向側の富田はン、さうでおますい、前夜から今朝、音も聞きまへンな、また妙に何を考へて居なはる、手取山の一件に御屋で智恵の借貸は出来まへンが、貴君も近來は冴へンなア

誰をか相手に引出さんさすれぞ、よくく氣の向た時でなくば長屋中この贅六に應ずるものなく、たゞ筋向ふの宗玄坊、今しも托鉢に出かけの用意、がちやく禪杖やら鐵鉢やら商賣道具を取揃へる物音、きく濟した贅六また此奴に喰ひ付きぬ、

「宗立はン、さうぢやいな、そろくまた今日も例の飛花落葉で風に隨うて出かけなはる工合ぢやが、この頃は鐵鉢の中へ物が這入ますかな」

贅六に誘ひ出されし宗玄ならぬぞ、今しも市中の托鉢に出かけの用意、はや禪杖も鐵鉢も網代の丸笠を取揃へて破れ衣に鼠の脚絆、草鞋の紐を結びながら、實は昨日より飢ゑたる目の

球を額越に光らしぬ、

「いつも相變らず獨りで喧ましい上方だな、しかし如是我聞あの八卦屋三千三屋が乾物にもならず無事に生きて出たさすれば、この宗玄また坐禪ばかり組で居れんわい、衆生濟度のため、そろく出かけやう」

いかに喚き散らしても長屋中に相手なき贅六太夫、これ幸の的に取つて俄の大口を開けながら、けらくく笑ひ出しぬ、

「そろく出かけても、慌て、駈出して、そりや勝手ぢやが宗玄はン、衆生濟度のためは少々、聞き辛いな、ハ、ハ、釋迦や達磨は知らん事、末世の身で、あほらしい、あかの他人の衆生を濟度するより御本尊の鐵鉢一個が大事ぢや、からく喝の空で持つて歸らぬやう、なるべく大氣根に貰ひ歩いて來なはれ、立ん坊の手取山は横になつて折れくさつたし、

あの朝鮮髻石作が出て失せた以上、この長屋で外を稼ぐのは宗玄はン、貴君も私との二人ぢやがな、あこは皆これ蒲鉾のやうに床板を放れる事の出来ン奴等で、同じ外へ出るにしても髻目鏡の古洋服、出れば其のまゝ動きの取れン會社の職工で、市中を自由自在に稼ぎ歩く我々の仲間へ這入らんわい、なア宗玄はン

「ハ、ハ、ハ、三世不可得、自他無差別、この長屋を出るものも出来ないものも回光返照で一味平等だ、さう言葉に無妙魔界の角を立てゝは宜しくない、人間萬事無念無想にして始めて六塵の中に安住し得らるゝ事を悟らねばならン」

「ぢやら〜、置いてンかないな宗玄はン、外の奴は兎も角、この私に抹香臭い白痴恐喝の受賣文句は入らんわい、ハ、ハ、ハ、腐り經文の端くれを聞き覺えに嘔り出すより一時も早う方角の知れた婆娑へ飛出して、今いふ通り鼻の下を稼ぎなはれ、人間萬事無念無想が錢にな

るか、人間萬事塞翁の馬の糞でも拾ふたが勝ちや、ハ、ハ、ハ、」

「や、いかに心易い交際でも、白痴恐喝の受賣文句は、聊か聞捨にならンぞ、腐り經文の端くれを嘔つたは猶更ら以てけしからン、そも〜我禪道は經文も學問も用のない教外別傳の不立文字だ、修多羅の教は月をさす指の如し、既に門を入れれば瓦を提げて何かせん」
「何ぢや、瓦を提げて何かする、さア何ででも仕て見くされ、それこそ心易いが此ま〜聞捨にならンぞ、全體また一味平等ぢやの自他無差別ぢやの吐す汝が、いつも隣家の色情學者ご掴み合の喧嘩しくさつて、この私に今更ら諫言がましい言葉に角を立てるのは、けしからンの上に飛出た奴ぢや」

損が無うて隙さへあれば誰でも彼でも敵手に取る贅六の勢ひ、うか〜例の術にかマツた南無三三後も見返らず出遁す宗玄坊、また入口の瘡毒お六に不意の關所を築かれぬ、

「あら、ちよいと宗立さん、お依頼があるんだよ」
流石の大自然も忽ち其まゝに立往生、わざと俄に網代の丸笠を戴きつゝ、急ぎ足に振り返りぬ、
「あの上方に妨げられて今朝は案外遅くなつた、刹那も六度萬行、時に何か、急の用でも
ありますかな」

いつもながら、見れば見るほど持つて生れし花の顔面を、惜しや浮世の嵐に吹ぬかれた風穴、
亂れし結び髪を蒼蠅さけに搔きあけて、幾何の男を沈めしか片頬の笑渦に猶更ら物凄じ瘡毒
お六、

「宗立さん、また出がけを止めて済みませんかね、今日も妾が持つた男の命日ですよ、加之
も只、死だのでなく、さんざ迷はしぬいた結局の果に、よくない業を仕ましたからね、い
はゞ妾が手を下して殺したも同じ男で、猶更ら寢覺が悪いんですよ、思ひ出せば、幾何か
罪が亡びましやう、弔つてやつて下さいな」

「や、またかい、さう數が多くつては困る、いちく面倒だ、其うち閑暇のある時、かため
て一度に」

「ですがね過日お頼み申したのは妾が心底から惚れた男で、けふの命日に當る佛は今いふ通
り考へるご氣持の善くない事をして、あの世へ無理に追ひ送つた男ですからね、是非とも
此二人だけは、別に弔つて貰ひたいんですよ、なアに後の有藏無藏は、此方へ逆念佛の一
唱も取戻して宜い奴等さ、しかし宗立さん、いやなら嫌で宜しいよ」

まだ残る色氣の目元に一種の凄味を帯びて、聊か鼻にかゝりし聲もろこも、じろりご額越に
睨まれし宗立坊、

「何、決して、いや、こいふではない、本地法身、慈悲善根、さらば其人のため八萬四千の

法門を縮めて無上の一偈を與へやうかな」

『法華ですよ』

『法華、法華は、過日の男ぢやアないか』

『ありやア互に好き合つた情人だから、實は禪宗でも法華でも端唄でも何でも妾の念さへ届きやア浮びますがね、今日の佛は大變な固法華で、これを嬉しく往生さした理由ぢやアないンでしやう、だから猶更ら外の宗旨は、いけませんよ、是非とも交りツ氣のない法華で、やツて下さいな』

『こりやア困つた、さゝなるに甚だ迷惑至極だ、全體あの日蓮宗では四個の格言中、禪天魔ミ言ツてね、我祖道を惡口罵詈の謗法に陥れた宗門だよ、殆ど火ミ水だ、いくら何でも今更ら俄に、太鼓は叩けないよ』

『叩けない、叩け無きやア叩けないで、無理に叩いてくれたア頼みませんよ、誰が頼むもんか、木にしろ薬にしろ頭を丸めて法衣を纏ツてるから、犬猫の泣聲より少しやア殊勝だミ思ツて、ちよいと時の間に合せて頼んでやツたんだ、それに何だミ、宗旨が違ツてる、ホ、ホ、そりやア立派な寺でも持つてる坊さんのいふコツた、今この長屋で火も水もあるもんか、ふざけた乞食坊主だよ、腐ツた腸でもあツた時、取て置いてあけるからね、それを樂しみに早く出て行くが宜い、用もない前で、ぐずぐずして居られちやア目觸りだよ』
瘡毒お六のため一息に吹飛されて、この時ばかりは實際の飛花落葉、風に隨うて遁出せし宗坊の後より、のこく運わるく出て來たは奥の院の色情學者、近ごろ自己は此長屋の九尺一間にさへ満足に住兼ねて居ながら、まだ懲りもせず人間萬事を生殖機能の一局に捻込まんとする例の富田剛太郎、

『おや色情の書生さん、ちよいと聞きたい事があるんだよ』

この瘡毒お六には一度、あの石作三朝鮮髻の唄へ吐鳴込みし時、不意に背より咬へて振られし事のある色情學者、おもはず面を皺めて立停りぬ、

『僕に何か用かね』

『別に何も大した用は無いですかね、まアお掛けなさいよ、實は此二三日、マツチの内職が切れ目だから、暇で困ッてるんですよ』

『いや、其方は暇でも此方は少々、急ぐ用があつて、今出かけるところだ』

『だって、宜いちやアありませんか、さう野暮に悪固く、今日に限ッて急がないでも、事は足りませんよ』

『僕は急がないご用の缺ける事があるんだ、もし何か談話があれば此方も暇のある時、ゆる

ゆる話さう』

『ですがね、かういふ長屋に住んで其日に追廻される人間が、さう両方に都合よく暇のないもんですよ、妾の暇な時に交際ッて貰へば、また汝さんの暇な時に手を空ても交際ッてあげますよ、それも世間に對して、恥かしくない眞面目な學問でもする尋常の書生さんなら知らない事、よし出来ないに仕ろ、青ツほいに仕ろ、聞けば色情の端くれを口にする書生さんが、それぢや困るよ、第一この妾なんかの面前を黙ッて平氣に通れない筈だよ、修行のため蒼蠅く出て来て、無理にでも教へてくれさいふのが正當だ、さう間違ッたか、假りにも警察へ一夜、それで止められた人ぢやアないかね、正直にいへば狎が噓をしたやうな顔の雑作で、よほご女縁に遠い鑄型だがね、なアに女は時三場合の對等物だから、根氣よく氣長に覗へば一人や半分ぐらゐ出来ないごも限らないよ、しかし性の知れた筋の立ッた

女らしい女さいへば逆も汝さんのやうな人種ぢやア無効だ、幸ひ妾が秘傳を教へて上げやう、味方の男さ違つて、敵になる女も女さんさ戦つて来た敵の女の妾が、内々そツミ謀策を漏すんだからね、これこそ汝さん、きツミ出来る理由だよ、同じ長屋の情誼に、無價で教へて上げやう』

苟くも吾人々類の元始生物以來こゝに避くべからざる自然の約束と共に傳へ來れる靈妙神祕の一局として、その一局に人事一切の本能を遺憾なく歸納せしめんとする色情學者、いはゞ生理上の道德學者を以て任する空前絶後の富田剛太郎が、交尾期の付いた犬の如く女の尻を追廻す色情狂さ見られしのみか、人間の屑にも數へられぬ瘡毒の口より嚙で吐出す如くに扱はれて、もはや堪らず、くわツミ満面に朱を注ぎながら眞ツ白の眼球を剝出しぬ、されど瘡毒お六は、ごこを風が吹くかこいふ風情、平氣に濟したものでなり、

『おや、この人は變だね、急に妙な顔を仕出すよ、そりやア嬉しいのかい、怒つてるのかい』
『おい、こら、醜の醜、それ以上に人間の恥辱を曝し得られない醜劣の極點を印した女だから、固より取るに足らず齒牙には掛けて居らんが、全體この僕を何ぞ心得てる、苟くも吾人々類の生理上より自然の本能を發揮するご共に新たなる一の道德を實行せしめんとする僕だぞ、その僕に對つて、交尾期の付いた犬のやうに女の尻を追廻せごは言語道斷、けしからん事を吐す瘡ツ毒だ』

瘡ツ毒さいはれて思はず、身を隠す女でなし、これ見てくれさいはぬばかりの顔面、ぬツミ突出しぬ、

『おや、この豆殻め、生意氣だ事、ばら〜ご弾け出すよ』

『何、豆殻だ』

「狎が噓をしたやうだと言ったのはね、お世辭だよ、軽くツて實のない豆殻野郎で澤山だ、その豆殻に火を喰ッ付いたやうに、いくら汝さんが其處で赤くなっても、ばちく音ばかりさしたツて、無効だよ、ホ、ホ、けしからんも、あまからんも、あつたもんか、言語道斷より、そんじよ其所等で呆れの宙返りだ、五六年も修行してから出直して來るが宜い、まだ妾の前で眞正面に向いて來られる人間ぢやアないよ」

「人間でない、汝ア何だ」

「瘡ッ毒さ、武士の向疵さ、すきな道で卑怯未練もなく、敵いふ敵を引受けてね、さんざ浮世に戰ツて來た金看板だ、棒を呑だやうに突ツ立ッたまゝ見物する罰が當るよ、これ豆殻さん、よく聞きなさい、人間いふものア神様でも佛様でもないからね、ぎツかに缺點がなくツちやア、ならないもんだ、たゞ目に見えるか見えないかさいふだけの事さ、ま

して天ぶら鍍金の流行る今の世の中は上ツ皮の面ばかり立派で、夏の田舎鯖より臍の腐ツた奴が多いよ、男も女も此ごろの馬車や俵で飛す人間を丸裸にして、お醫者ご金の力を取ツて見なさい、ごくに満足な身體があるもんか、それごは反對で、この妾なンかア落ちて枯れても自慢ぢやアないが、この通り人の目に付く顔へ祕さず包ます天下晴れて正直に三個所の疵を現はした外、憚りながら五體に卵の毛で突いた痕もない女だ、もし吹出た瘡毒が恥辱なら、これを無理に押へて吹出さない瘡毒は猶更ら恥辱だ、悪い事をして監獄へ行く奴ア此上もない正直だよ、監獄へも行かずに悪い事をする奴ア生涯そのまゝ罪の亡びない大盜賊の詐欺師だ、加之も豆殻さん、瘡毒も瘡毒に依りけりて、妾の瘡毒ア世間の淫賣や娼婦と違ひ自分の氣に染まな嫌な男に色を賣ツて、錢を取ツて來た慾の凝結物ぢやアないよ、話せば長いが、つまり金ご勤めの外で、いはゞ戀ご情の筋道に、あらゆる剛

敵引ッ組だ紀念の手疵さ、汝さんの色情さかいふ事は全體、ギンな團子細工を食過ぎて
 放り出した屁理窟か知らないが、まだこの道にかけては青ッほい、雑兵葉武者の影も踏め
 ない分際で、妾の瘡毒に對ッて口を開くのは恐れ多いよ、土下坐でもして拜みなさい。』
 瘡毒お六のために饒舌りまくられて、流石の色情學者も例の一局を持出す勢ひなく、たゞ茫
 として思はず歎聲を漏しぬ、

『醜の醜なる無教育の劣等動物も、こゝに至ッて 殆ど遺憾なく其極に達せり。謂つべしだ、
 もはや人類中の語を以て對すべき程度でない』

泣くが如く、泣くが如く恨むが如く訴ふるが如く、自己みづから自己に語ッて首肯しながら、
 飄然として長屋を立出でし後姿、實は二三日以前より九尺一間の落城に近づいて、まだ飢死
 に間はあれど其日の旦夕に迫れる富田剛太郎、ひよろ／＼と猶更ら影うすし、

瘡毒お六、冷かに其後姿を見送りながら、長煙管に粉莢を詰込みつゝ手許に残るマツチの
 火を摺付けて、ばツミ破障子の外へ煙を輪に吹出しぬ、

『かわいさうにねエ、まさか産付の素馬鹿でもないだらうが、さういふ拍子に間違ッて、あ
 あいふ人間に出来たらう、やはり一種の病的かね、親類でも縁者でもないが、同じ長屋に
 住でる以上、あの病的を癒してやりたいと思ッて、わざと小ッ酷く氣の付くやうにコキ卸
 して見たが、無効らしいよ、瘦せて居ても骨組は丈夫だし年齢は若し、さうせ器用な事は
 出来ないにしろ人間相應、つまらない屁理窟を止めて泥溝浚漉か、犬殺にでもなれば宜いも
 のを、何さいふ不量見な奴だらう、あれで食ふや食はずに色情の學問は凄まじいよ、一
 度、さツかの淫賣か茶屋女を相手に無理情死でも仕損ッたら、目が覺めるかも知れないが、
 まア當分あのま／＼ちやア焼直す方も工夫もないねエ』

串削りの半助老爺、ひよこりご例の鳶鼻を蠢めかして、掬ひ願の馬面を突出しぬ、

『お六さん、いちく出る奴を喰止めて豪氣な威勢だね、ミシだ富樫の女左衛門が關守にな
ツたよ、ハ、ハ、ハ、』

『おや、親方、實ア二三日マツチの内職が切目ですからね、たゞ手を空けて茫然してるのも
變だし、ちよいご保養がてらに慰み半分、ふざけてるンですよ、わる甘くツて聞辛いミシ
ろは、耳を塞いで居て下さいよ』

『さうして、甘エミころか、ぴりり辛く澁く乙に出来るよ、托鉢坊主も坊主だったか今
の青二歳を豆穀野郎は、よかつたね、ハ、ハ、ハ、その調子で一件、さうだい、わツしの隣屋
に巢をくツてる上方利の掠鳥を追出すからね、羽翼の毛でも撈ツて見なせエ』
きくや否、贅六また壁越に吐鳴り立てぬ、

『な、何ちや、上方種の掠鳥、鳶の鄰屋に掠鳥は縁がないでもないが、日本一の淨瑠璃太夫
を掠鳥は汝まア、よう吐した、これ幸ひに今日こいふ今日こそ平生の總勘定、キツぱり
ご差引してやるぞ、しかし其前お六はんに一言いうて置くが、瘡毒の薬には掠鳥の毛より
鳶の糞が、効能あるさうちやわい、ハ、ハ、ハ、』

串削りの半助老爺、ますく鳶鼻を蠢めかして壁越の喧嘩面、鄰屋の贅六また掠鳥こいはれ
て其ま、治らぬ奴、折しも瘡毒お六の外、長屋中一體の不在なり、

『さア贅六、覺悟しろ、いつも柳の下に鎗の居ねエこいふなア此こつた、平生は近處合壁の
義理で、無理にも堪忍してやツたが、いよく今日こそ一騎打だ、血嘔吐の出るまで叩き
合ツても組合ツても止め手はねエンだからな、お互エに安心して遣らうぜ、かう長屋中が
揃ツて出る事ア珍らしいよ、ねエお六さん、喧嘩半途で茶漬飯を食ふ上方流ご違ツて江戸

ツ子の早業だ、ごうせ忽然、ミツちか息の根が止まる結果だからね、迷惑だらうが後の證
據人に見物して居て貰ひてエよ、さア掠鳥出ろい』

瘡毒お六、また悠々ミ粉賣の煙を輪に吹き續けながら、その長煙管の雁首を音高く破障子の
角に叩きつゝ、くの字形の身を捻つて首を突出しぬ、

『親方、お止よ、そんな掠鳥一羽、ミツちめたつて仕方がないさ、やはり其まゝ其處で放し
飼にして置く方が面白いよ、をりく妙な状態で羽ばたき仕たり、また變な聲で囀つたり、
結句をかしくつて慰みになるからね、當分まア助けてやるさ、なアに入らなくなりやア、
いつでも捻つて掴み出せるぢやアないかね』

『ぢやア今日のところ、まア助けてやらうよ、掠鳥、ありがたく思へ、しかし二度ミ再び許
さねエから、その覺悟で居ろよ、ハ、ハ、ハ、流石に驚きやアがツたミ見えて、ぐうこも、すう

こも吐さねエ』

贅六、さらに急かす慌てず狼狽す、こもも例の水飴一流、ねちくねんばりミ饒舌出しぬ、

『數のない手品師の種ミ一般で、それだけかいな、もう、それだけで二人ミも、あこへ残る
文句はないかな、もし萬一、まだあるこいへば、日が長い、わけて私は日中に用のない身
體ぢや、ゆるく聞いてやるぞ』

『な、何だミ、この獸類め、ふざけ過ぎて後悔するな』

『ハ、ハ、ハ、雀は海中へ入つて蛤になるミ聞たが、この長屋の掠鳥が急に獸類になつたわい、
ハ、ハ、ハ、しかしながら、これまア、いかに口は汝の口で勝手に聲が出るにせい、日本一の
淨瑠璃太夫を掠鳥ぢやの獸類ぢやのミ、ようも吐した、さア上方もンは喧嘩半途で茶漬飯
を食ふか食はンか、また江戸ツ子ミいふ人間が、これほごの早業か、注文通り息の根の止

まるまで、やらかして見やう、お六はン、はンぢやない、お六さん、迷惑ながら後の證據人に瘡毒の膏藥でも張替て、ミツくり見物して居なはれや、おツミ、ミツこい、見物して居て貰いてエよ、ハ、ハ、ハ、

口ばかりかき思へば、この贅六、のこく、自己が塙より立出でぬ、

『さア出て来い、出くされ、南無阿彌陀佛、念佛の一唱も先へ稱へて置いてやらうわい』

串削りの半助老爺ミ瘡毒お六の二人を敵手に取つて、例の口ばかりかき思ひの外、俄に自己が塙を飛出しながら、袖を卷上げて錢にもならぬ事に腕を叩く贅六太夫、いかにも平牛の上方根性に不似合なれど、實は地の利を考へての業、もし叶はずば其ま、長屋の外へ逃出す覺悟なり、

『さア出たぞ、長屋中一體の不在で止め手のないは其方より此方の幸ひ、喧嘩の張合があッ

て猶更ら面白いわい、常平生は兎も角、かういふ時に汝、この條鐵入の腕を見せてやるンぢや、藝ミ女子で上方を責落されて来た色男ミいへば、定めて金ミ力がないミ思うて居らうが、金は名人に不用ミ心得て今日まで、いや、この後も作らんぞ、しかし持て生れた方は自然ミ身に付て捨やうがない、その力を汝、驚愕するな、現に今こゝで出してやるンぢや、へ、へ、へ、五斗俵を手鞠に取つて来た男ミ知らんか、さア串削りも瘡毒も出て来い、出くされ、この世の引導を渡してくれろ』

叫びながら俄に氣が付いて、そツミ商賣道具の三味線を入口まで持出し、いざミならば荷いで遁出す算段、もはや後に心の残る品は塵一本もなし、

『まだ出くさらんな、ハ、ア、この猛威に恐れて五體が居縮ンだミ見えるわい、いや、道理ぢや、無理でない、さうあるべき筈ぢや、かりそめにも日本一の淨瑠璃太夫、いよく本

氣になつた上は、おのづか威に打たれて近寄れまい、こいつ仕舞うた、も少し差控へて、わざと弱々しう向へば宜かつたに、あんまり力足を踏過ぎて折角の敵手を凹ました、敵手が無いとすれば、まさか一人喧嘩も出来ンが、さりこては惜しいわい、腕が鳴るわい、かういふ時に白刃を提けた半狂氣で、警察も巡査も持餘した亂暴者が七八人も一時に此長屋へ押込で來おらんかなア』

半助老爺、おもはず鳶鼻を疊み上げて顔中の高笑ひ、

『ハ、ハ、ハ、乃公も今年五十三だ、若けエ時から随分生命しらずに火の粉の雨も血の雨も潜つて來たが、まだ五斗俵を手鞠に取つた上方野郎に出喰さねエ、ギンな味がするか、ちよいと一口、舐めてやらう、動かす其處に居ろツ』

菊池の千本鎗に似たる串削りの磨出し庖丁、ぴかりと破障子の影より光るや否、贅六、はつと驚いて入口に立掛けし三味線を取りながら、そろく遁腰の體を、ごうせ斯ういふ奴も待受けし瘡毒お六の聲、

『親方、早く遣ッ付けないと其奴、遁出すよ、こゝから妾は火鉢の灰をぶツかけてやるからね』

『ハ、ハ、ハ、お六さん、遁けりやア遁してやるさ實ア野郎、ごうするかと試しに恐威かして見たのよ』

贅六、やうく安心しながら、三味線を抱へしまゝの減らず口、

『本氣で來おれば面白いが、ぢやらくミ、あほらしい、嘘や試して喧嘩が出来るかい、そんな奴に暇を潰さうより今日は氣を變て此まゝ晝の流しに出てやらう、毎夜々々聲ばかり聞かしてゐる女子ごもに、また顔も見せてやらんらご罪ぢやわい、ハ、ハ、ハ、』

最初より敵の勢ひに地の利を考へて自己が塹を飛出し、いざこならば商賣道具を荷いで遁出す覺悟の贅六、されど喧嘩は案外の無事に治りて、今更ら三味線を抱へたま、元の巢にも這入れず、これ幸ひの晝稼ぎこは、ごこまでも損をせず押の強い口の減らぬ奴なり、

『いや鳶の阿爺、悪うは取らんぜ、おかげで夜だけの家業も今日は白晝の流しに出ますわい、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、此後も、かういふ鹽梅に物の張合を付けて貰ひたい、兎角この名人いふものは身體よりも氣が第一で、また錢よりも藝が惜しうてな、つい、それ、怠けるでもないが、自然に稼ぐのが嫌で困る、ハ、ハ、ハ、ハ、』

平生は長屋を出て錢の取れさうな邊より糸の音を出せご、今日は此奴も聊かの意地、はや長屋の中より調子を合して弾出しながら、また出口の瘡毒お六を差覗きぬ、

『親方、早く遣ッ付けないご其奴遁出すよ、こゝから妾は火鉢の灰をぶツかけてやるからね、ご仰せられましたは嫌御前の貴女様で御坐りますな、いや御親切に、御禮の申上げやうもない、しかし折角の思召ぢやが、夏の瀧違つて火鉢の灰を頭上へ浴びる事だけは、當分まア御辭退を致しますわいな、ハ、ハ、ハ、ハ、』

ゆるく饒舌りながら實は歩早に立出でて、吾妻橋の此方まで來かゝる前方より、色情學者の富田剛太郎、ほんやりご氣脱の如く歩み來たりぬ、

『やア、富田はん、ごこを彷彿ての歸途ぢや、時に貴君も今日の出がけは面白からん事で、随分あの瘡毒に遣られた工合ぢやが、その復仇この私が美事に取つてこましたぜ、自慢ぢやないが禮も入らんが、聞かしたかつたな、例の串削りご彼女を半殺しの鱈のやうに、きゆうきゆういはしてやつたわい、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし貴君一人で今うかく歸ッては不可、彼奴等この私に押へ付けられて、無念心外の遣り場がない最中ぢや、まさかの時の力にはな

るまいが、せめて古洋服の目鏡か托鉢の戻る時刻まで富田ハン、君子は危ふきに近よらず、
差控へた方が身のためぢや』

自己が饒舌るだけ饒舌れば其まゝ後も見返らず、飯の杯の糸を鳴して立去る後姿に、吾人々
類の一局も持餘した色情學者、猶更ら茫然と見送る影より鐵砲策を背負ひし屑屋一人、

『ごごです、お拂ひ物は全體、ごごにあるんです、あまり遠くツちやア困りますね、物に
も依りませんがね』

富田剛太郎、俄に心付いて歩み出しぬ、

『や、遠くない、すぐ其處だ、業平町だよ、近いよ』

種族繁殖の外、抱擁快味の外、その一局より別に新なる生理上の道徳を産出さしめし色情
學者も、自己まづ其日の飯の種を産出し兼ねて、もはや吾人々類の爲ごころでなく、いよいよ

よ九尺一間の落城に迫りし苦しませ、せめて五厘銅貨の一個も拾うて來るかと思へば、途
中より鐵砲策の屑屋を連れ歸りぬ、

『おい屑屋ごごだ、この奥だ』

『は、ア、ごごですか、この奥ですか、わざく、麻橋の先方から引ッ張ツて來なくツても、
ごごか澤山この邊に同業者の奴が徘徊して居さうなものですな、全體ギンな品です、まさか
人間の屑ぢやアありますまいね、ハ、ハ、ハ、』

今朝は女の腐り果てた瘡毒お六に嚙で吐出され、今また連歸りし屑屋に面白からぬ念を押さ
れて、おもはず一種の感に打たれし富田剛太郎、其まゝ悄然と自己が携へ入りながら、敵を
見返る如く振り返りぬ、

『少し都合があつて急に外へ引移るから面倒でならない、これだけだ、本箱が一個、中にあ

「る雑誌は賣るが書物は賣らないぞ、袖著ミ毛布が一枚、や、待て、毛布だけは残さう」
 「雑誌ミ新聞は目方で、本箱ミ言ツたところが桐ぢやアなし、かう薄ッべらな杉の剥板で、おまけにガタ／＼ですから幾何にもなりませんぜ、つまり夜著だけです、これも皮は襪襪ミ来て綿ア二三度も打返した眞ッ黒な奴、逆も價に踏めませんよ、たゞ屑屋の申譯に冥加錢を置くんですな」

「酷い事をいふね、いち／＼文句は入らないから、總體で幾何だ」

「嫌なら嫌で、お止なさいよ、無理に戴かうミは、いひませんから、まづ總體ひツくるめて十五錢ですな」

「十五錢、いや屑屋、十五錢ミは單に、十五錢の意味かね」

「何處だツて十五錢は十五錢ですよ、十錢銅貨一枚ミ白銅一枚ですよ、これでも實ア、のこ

のこ既橋から連れ込まれて、あまり有難くないんですが、折角／＼まで来たもんですからな」

「おい屑屋、雑誌や本箱は兎も角、この夜著は著て寝られるンだぜ、現在この乃公が毎夜、著て寝たんだぜ」

「そりやア、貴君の夜著ですから貴君ア著て寝られましやうよ、しかし世間の人間は其まゝぢやア著て寝ませんぜ、たゞ襪襪ミ見ての價ですよ、だが貴君の身に纏ッてるものア割合に破れちやア居ませんわ、まさか著物はいけますまいが、羽織は如何です、それなら三十錢に戴きますぜ」

「そろ／＼丸裸に剥き取る價を付けられて、富田剛太郎ます／＼感慨に迫りし體、されど屑屋を敵手に喧嘩も出來ず、まして背に腹は替られぬ場合、二日越の飢渴に猶更ら堪へ難き無念

の涙を絞って、拳を握りながら苦しげに叫び出しぬ、

『屑屋、賣って仕舞はう』

『十五錢ですぜ』

『いや二十錢に買へ』

『ぢやアよろしい、これも何かの縁だ、五錢は人助けだと思つて、二十錢に買ひましやう』
死して百年の後世、いかなる天下の知己を得るか知らねき、生きて現在の色情學者、鐵砲策
を背負ひし屑屋のために踏み倒されて、今更ら浮世の風に骨を刺さるゝ心地、無量の感慨う
たゝ胸に迫りぬ、

それも其筈なり財産全部を擧げて十五錢、人助けといふ無禮の言下に五錢を加へられて、や
うやう二十錢銀貨一枚、それさへ嫌なら止せさいふ面相、恩に著せて出行く屑屋の後姿を見

送りて、ますます一種の感に打たれぬ、

いかに芋の蒂を嚼ればきて、二十錢銀貨一枚は半月の露命を繋ぎ難く、たゞひ身に纏ふ衣類
を脱で丸裸になればきて、もはや一月の生命は覺束なし、

されど夜著を賣りて古毛布を殘せしは、本人まだ急に飢死もせぬ量見、まして雑誌は賣れど
七八冊の書物を惜んで小脇に拘へし心中、これが此奴の病的、やはり例の一局を捨兼ねて相
變らず吾人々類の生物以來を振廻す覺悟なり、

折しも串削りの半助老爺ぬツミ、馬面の鳶鼻を突出しぬ、

『先刻から見て居たが、屑屋を呼んで来て雑物を叩き賣つた工合ぢやア汝えさん、ミツかへ出
なさるやうだね、實ア肌が合はねエから自然、あまり平生は親しくも仕なかつたが、さて
出るこなりやア妙なもの、ちよいと止めたくなるよ、是非も出るに極めたかね』

『聊か期するところあつて已むを得ず、急に他へ轉ずる』

『まさか今朝お六さんにやられた故でもなからうねエ』

『ハ、ハ、固より齒牙にかけて居らないさ、第一また他に動かさるゝ僕でない、別問題だ』

『それなら汝エさん、かう揃つて長屋中の居ねエ時に出なくつても宜からう、それ〴〵挨拶

の一句も仕て出なせエよ、すりア人情また幾何づゝか錢別も出せるこいふもんだ、ね』

『や、僕の都合上、自分の物品を賣つて屑屋から相當の代價は取るが、他日の志望あるもの、

この長屋の人間から叩りに錢別は受られないよ』

『何この、長屋の人間から叩りに錢別は受けられねエ、わざ〴〵誰が受けてくれ〴〵頼んだい、

ふざけた事をいふ南野郎だ、出る奴に文句ア入らねエが、おい、奴、今の屑屋ア相當の

價で買つたと思つてるか、うかく〴〵すりやア身に纏つてる羽織まで引ツ剥がれさうな馬鹿

待遇にされてよ、おまけに人間の屑ア買はねエ〴〵念を押された奴が、人の親切に對つて何

さいふ生意氣な御詫を吐きやアがる、かあい氣のねエ奴だぜ、ハ、ハ、ハ、お六さん、いよい

よ豆殻が風に吹かれて、ミツかへ散るさうだ』

瘡毒お六また聲に應じて首を差出しぬ、

『おや、さうかね、豆殻さん、全體まア何處へ引ツ越すんだよ、餘計な世話だが行く先に雨

露を浚ぐ目的はあるのかね、そりやア兎も角、例の色情沙汰に付て屁理窟を並べる事だけ

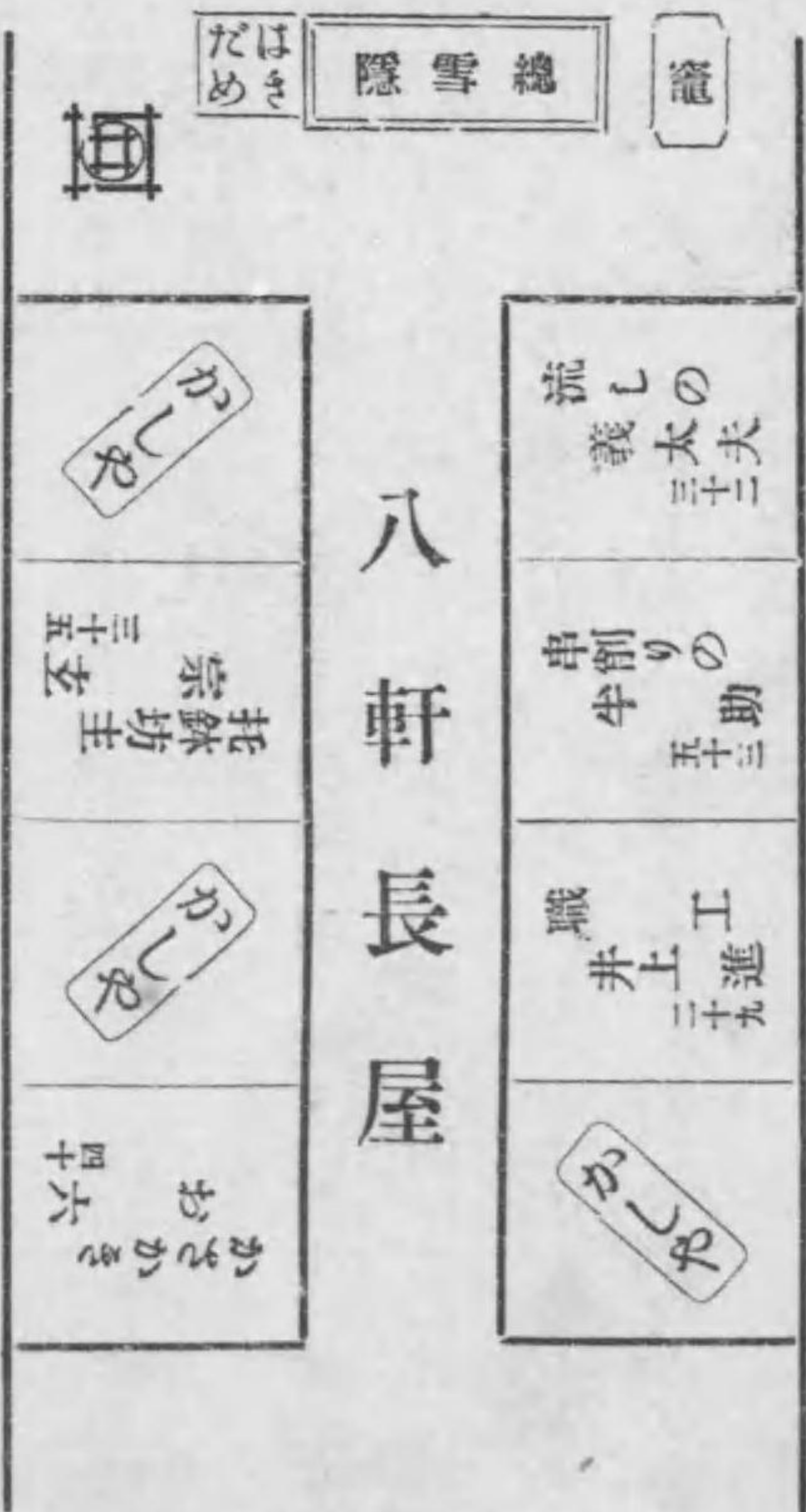
は一切、お止よ、わるい事は言はない、汝さんの身の爲だ、あの病的がある以上、いくら

本を讀でも考へても、人間の仲間入は出来ないからね、今朝もいふ通り今のうち氣を持直

して、大殺しの稽古でもするさ』

そも〴〵八軒長屋の開關以來、あの太浦卓三〴〵熊さん夫婦の外、いづれ満足に譽められて出

た奴はなけれぎ、また今この色情學者ほぎ手荒くコキ卸されて物の哀れに立退た奴はなし、



八軒長屋

無相無著こいへぎ、飲まず食はずは此四大の形體を奈何せん、頓如來禪こいへぎ、たゞ寢轉

ンで居ては智恵神通の妙用も發せず、仕方なしに起きて市中を化現しながら、けふ一日の利生方便に貰ひ歩いて、夜の十時過に歸り來る宗立坊、

折しも例の贅六太夫、此奴またこれより外にない飯の種の古三味線を荷いで夜露に濡れながら、ほそくミ歸り來りし業平町の辻、星明りに闇を透して聲をかけぬ、

『宗立はン、ぢやないか』

『や、淨瑠璃さん、今かい』

『私の今ごろは平生より早い方ぢやが、暮れてから物にならん宗立はン、えらう今夜は遅いな』

『心機一轉、ちご今日は方角を變て遠方へ歩を伸した』

『外を稼ぐ人間、足を縮めたままで錢になるもの覺に限るわい、ミこころで宗立はン、伸した』

甲斐がおましたかな』

『ハ、ハ、今日は近來にない鐵鉢を満して來た』

『そりや豪い、奢りなはれ、それに引替て宗立はン、憚りながら大地を叩く槌、出れば空手で歸らんこの私が、また今日に限って近來にない外れやうぢや、實は例の鳶鼻瘡毒を敵手に喧嘩してこました勢ひで、いつにない晝から飛出したが、さういふもんか、ふしぎに、あかんわい、半日半夜の間、ぐるり本所一圓を流し歩いて、たつた一軒、それも各い奴でな、酒屋を六分通りも語らしくさつて、これまア五錢は宗立はン、さうぢやいな』

『ハ、ハ、盛衰消長、致方がない』

『致し方がないで濟むかいな宗立はン、よう考へて見なはれ、かりそめにも名人畑の太夫が酒屋を半段以上も語つて、たつた五錢は、あんまり致し方が無さ過ぎるわい、これこい

ふも原因は彼奴等、あの鳶鼻瘡毒ぢや、けつたくその悪い、藝人首途にケチを付けくさつて、おのれまア、その分で置くもんか、お虎婆々が苦駄張つて朝鮮髯も石作も出た上は、この長屋で一番の古顔、この私ぢやぜすれば、宗立はン、喧嘩の敵手は後へ廻して置いて、まづ差當つた眼前の義理人情いふもの、さうしてくれる、同じ時刻に戻つて來た二人のうち、今いふ通り一人の私は實のこころ、まだ夕飯も喰はンがな、それを氣の毒も思はず、近來にない鐵鉢を満した一人が黙つて居れるかいな、慈悲は出家の本願、わけて禪家は一切空ぢやが、悉皆は言はン、せめて半分、空に仕なはれ、や、宗立はン、こゝまで來て何故さう急に歩を早める、これ待たんかい、落著く先が外にあるかい、宗立はン、宗立はン、こいつ遁けくさるんぢやな』

今日は近來にない鐵鉢を満して来たといふ宗玄坊、すんでの事に贅六太夫のため撥み付かれンミせしが不斷の當意即妙、忽ち例の飛花落葉を用ゐて其場を幕過し去るや否、長屋の入口に鼻柱を打ちながら、自己が塙へ飛込で一點の火の氣もない無明の暗窟に空々寂々たり、やがて後より歸り来る贅六、いづれ黙つて無事に通らぬ奴、いかに蒼蠅く執念深く立停つて吐鳴散すかと思ひの外、ふしぎに其まゝ音もなく我穴へ納りぬ、

さては流石の奴も仕方なしに諦めて、半日半夜を流し歩いた草臥れ往生、もはや外道波旬の窺ひ寄る恐れもなしミ、久しぶりのカンテラに火を點じて近來にない鐵鉢の錢勘定、三味發徳眞智現前の端的よりも有難き白銅四枚を喜捨財の隨一ミして、二錢、一錢、五厘、孔の開た鍍錢までを數ふれば、六十萬億那由陀恒河沙の數には足らぬミ、この宗玄坊この八軒長屋に當位決定せし以來、いまだ會て得た事のない一圓三十七錢六厘なり、たごひ見性の大事は

誤まるこも、當處湛念この錢勘定は一文も誤まらず、正に一圓三十七錢六厘、宗玄坊、いよく自力貢高の我慢を發し、いざや佛心印の徹底、これより生死の境を忘れて馴染の居酒屋に參禪センミ、鐵鉢も綱代の笠も法衣も脱で三尺の吊戸棚に押込み、カンテラの火を消して、そろく元の無明暗窟より這出しつゝ、長屋を立出でンミすれば背後に人の足音、

『什麼、誰だよ』

いつの間に窺ひ寄りしか、まッ暗がりの中より贅六の聲、

『宗玄はん、今頃から何處へぢや、ミこへ行きなはる、一人では淋しかろ、この私お伴しやうかな』

『いや淋しうないぞ、和那も斷えず祖師の影を踏で、常に馬祖百丈を友とし南泉長沙を歩調』

を同うせる宗玄だ、ごこへ行くにも去來自在、まして尻骨下根の伴侶は入らん』

『さア、かうなれば入らんご吐しても、ついて行くぞ、近來にない鐵鉢を満した來た奴、そのままで濟まさんぞ、嫌なら嫌で分る事を、ようも汝、先刻は人を出抜て逃けくさつた、確實に錢勘定も見届けたぞ、ごこへでも連れて往て何ぞ美味いものを食はせ、食ふだけ食へば放れてやるが、それまでは金輪際、夜明しに付纏うてやる覺悟ぢや、さア走るなら走れ、もし喧嘩でもする氣なら改めて喧嘩も仕てやるぞ、實は打明けたごころ別に錢も酒も欲しうは無いが、此まゝ凹垂れては男が立たん、もう欲も得も捨てゝ意地ぢやわい』
油斷大敵、寸善尺魔、走れば走れ夜明しに付纏うてやるご聞て、流石の宗玄坊、もはや飛花落葉の勢ひなく、あッご呆れて其まゝの立往生ごなりぬ、

職工ごいへご實は元來の無器用に生れて、手にも足にも何一事これごいふ取極めた職のない奴、井上進ごは當世めいて名ばかり立派なれご、人間の出來工合は甚だ粗末な男、茫々たる火奴髯に狸の如き半面を埋めて、左の一方は割れたまゝの大目鏡を柱もない鼻の上につけて、あけても暮れても唯これ一貫の油染みた古洋服、降つても照つても齒の缺けた高足駄を穿ち、ごこの會社へ勤めて幾何ほごの日給を取るやら、のこご朝の七時ごころに立出で、ぐわらぐわらご夕方の六時ごころに歸り來る體、いつも足らぬ勝なれご自己の身體だけは、まづ一個の製器器械に備はりぬ、

加之も此奴これで尋常の職工にあらざる量見、何やら主義を持つて居るごの事、叩けば唸つて曰く、そもご國家を保つものは政事家にあらす軍人にあらす實業家にあらす宗教家にあらす學者にあらす醫者にあらす金にあらす器械にあらす猫にあらす杓子にあらす、天下の貴

族も富豪も彼等は皆これ我々労働者あるがために生活せる不川物なり、もし今ここに社會一般の労働者をして三日その業を抛棄せしむれば、交通に舟車の便利なく商界に物品の集散なく農業は荒み工業は絶え官衙の門は閉され會社の窓は開かず、忽ち人牛の機關を止め衣食住を奪うて驚天動地の暗黒面を演じ出す事、春先の襟元に這出す虱を捻り殺すよりも易し、さらし三日その労働者を取て養ふべき我國の統計を叫んで曰く、僅かに四百二十七萬圓なり、噫この四百二十七萬圓に向うて八軒長屋の九尺一間より割目鏡を光らす井上されば長屋中の人間、いづれを見ても語るに足るものなく、東京中の會社工場、いづれに雇はれても一月ご續きし事なく、日給また曾て二十錢以上を取りし事なければ、本人いよく唸つて曰く、主義ご本領は別にあり日給は我目的にあらず、なるほご職工の日給で四百二十七萬圓には聊か足らぬ勘定なり、この豪傑ふしぎに、今日だけは居酒屋の勘定に足りて、濁酒に酔

ひし千鳥足、ひよろ／＼して歸り來るや否、誰を相手さいふでもなく長屋の入口より喚き散しぬ、

『愉快々々、大いに愉快だ、ハ、ハ、ハ、しかし全體この酒さいふものに對して、かう政府が高い税金を取ツちやア、けしからん理由だぞ、そも／＼我々労働者の慰藉は何にあるかさいへば、たゞ世に存するための生命を支へる飯でない、逆も得難き肉でない、耳目を喜ばす歌舞音曲でない、無用の閑に供する文學美術でない、唯この酒あるのみだ、終日終夜さらに憩はず休まず致々營々として殆ご綿の如くなつた疲勞の身體へ、たま／＼注入する酒は労働者に於ける血液だ、金のある奴等が醜業婦を侍らして贅澤に酔をかう酒さいふは大に違つてぞ、彼等は酒の外に幾何でも興を呼び快を叫ぶ道具は揃つてるんだ、我々は數十日の濁腸へ注ぐ一滴の神藥だ、その神藥の價を彼等ご同一にせられて堪るもんか、國家の經濟、豈それ

酒税のみならんやだ、思つて茲に至れば寧ろ大に愉快でないぞ、慷慨悲憤、さうしても四百二十七萬圓の金が入るわい』



打殺しても急には死なぬ筈の立ん坊が、あはれや汽車のため横に跳飛されて往生し、長屋の床板と共に朽果つべき石作の朝鮮髻が、のこゝ無事に生きて立去りし以來、また例の色情學者も吾人々類の一局を何處へ持て行きしか知らねど、ふしぎに飢死の姿も見せず其まゝ消失せて、後に残るものは托鉢坊主と義太夫と串削りの半助老爺と瘡毒お六と四百二十七萬圓の古洋服と以上五人、三軒の空屋に如何なる奴が来るかと思へば、左側の奥の一軒目、色情學者の空巢へ盲目按摩一人、いづこよりか生命の杖の先に探り入りぬ、

たゞ一口に盲目按摩いへど、闇をも見透す目明の人間を願て追使ふ盲目あり、天晴れ名を得し大醫よりも玄關結構の立派な按摩あり、されど今この八軒長屋へ住込む按摩は、いふまでもなく場末の夜なく、大道に笛を吹て上下三百文と呼び歩く奴、まして盲目滅法の資本不用に掴み取るほどの藝もなし、

年輩まだ四十前後なれど、病痾のためか生來か、頭に一本の毛もなければ刺る世話もなく赤光りに充けて、ひよろ／＼骨ばかりに瘠こけた背の高い奴が、でこほこの古薬罐を戴ける體、古來また盲目按摩に美男なしといへど、案外これは念の入り過ぎた出来損ひ、淺草紙を揉で伸した如き面相、顔の中央にあるべき鼻が聊か横に振れて、齒齲の持上げし上唇より二本の腐蝕齒を現はせしめて、等しく兩眼でも揃う事か、同じ見えぬ目ながら左は窪んで固く閉ぢ右は飛出して蠅の如し、

財産は一挺の笛一本の杖、うき世を探り歩いて今まで何處に暮せしか、家主に連込まれて此時に入込むや否、藥罐頭を傾け烏賊耳を欵てつゝ暫し近處合壁の様子を窺ひし後、やがて俄に首を伸して唐犬の大聲を發しぬ、

加之も多年の霜夜に叫び馴れたる大聲、長屋中へ響き渡りぬ、

『お長屋の一同へ御免を蒙つて、此まゝ御挨拶いたしますよ、御覽の通り目が不自由だから、いくら甲が善くつても危険だ、なか／＼始めての場處では急に呼吸の取れないもんですよ、』

黙つて居れぬ奴は向側の贅六、

『いや御道理ぢや』

盲目按摩、思はず首を縮めて聲する方へ耳を傾けながら、またもや龜の子の如く次第に首を伸しぬ、

『ハ、この長屋には随分、こぼけた人が居ますね、今の聲は確かに向側で、加之も調子が上方もらしい、よし、まづこれで一人、聞き覺えたぞ、こゝろで皆さん、かういふ満足な人間でないからね、さうか面倒を見て猶更ら宜しく願ひますぜ、盲目ア生來だが、まさか此の腹から笛を吹て出た按摩ぢやアないんですよ、おい／＼お話し仕たい事も澤山

あるが、そりやア段々お馴染になつた上のこつた、名は與太郎といひますよ、ハ、ハ、ハ、ハ、

自己が塙で首を伸したまま長屋中への挨拶は濟めぎ、上下三百文の客は坐つたまま来てくれぬ大道按摩、赤光りの薬罐頭を傾けて時刻を考へつゝ、はや夕暮に近き其日の五時頃よりそろ／＼杖の端に脚下を探り出しぬ、かくこ見て取りし向側の贅六、

「按摩はン、これから出なはるのかな、目は見えンが稼業に抜目のない人ぢや、しかし五體に缺けたところのある人間は世間より近處の義理を仕て置かんこ不可わい、さうだす、お蕎麥の代用私に私の肩を一つ、揉で貰ひたいな」

按摩の與太郎、杖を片手に振返りながら、固く閉ぢたる左の目の皮を張りて、蠟の如く飛出した右の一眼、ぐる／＼と舐しぬ、

「は、あ、きのふ長屋中への挨拶をした時、いの一に餘計な入撥を仕てくれた上方もんだね、心切は有難いが、さうせ五體に缺けたところのある人間だ、近處の義理も缺けるよ、引ッ越の蕎麥も立退際に配ッて歩かう、へ、へ、へ、」

「めくら減法に相手のない挨拶を氣の毒に思つて、わざ／＼受けてやつたに、何ぞ吐しくさる、いの一に餘計な入撥を仕た、ハ、ハ、ハ、ハ、入撥は身に取て腹も立たんが、いぢくねの悪い、片輪根性さいふものは上方も江戸も同じ事ぢやなア」

「何だこ、この野郎、覺えてろ、こゝ四五日も経て長屋の呼吸を呑込た上は汝、たゞの盲目按摩ぢやアないぞ」

「なるほご、こゝ四五日も立てば、その目が開きますかいな」

按摩の與太郎、ぎゆうこ首を伸して前後を振り返りながら、俄の大聲、

『お長屋の一同へ御依頼かたぐ念を押して置きますぜ、御覽の通り人並でない不自由なも
ンだから、いづれ皆さんの御厄介にはなりますが、かういふ理由で、この上方もンだけに
は世話にならない覺悟で、義理も遠慮も仕ませんからね、時の場合、ギンな事があつて
も大目に見て戴きたい』

聞くや否、待受けた串削りの半助老爺、ぬツこ首を突出しぬ、

『按摩さん、その野郎は今に始まつた贅六ぢやアねエよ、誰に向ツても其奴その通りだ、し
かし安心するが宜いぜ、時の場合に限らず、ギンな事があつても、かわいさうに目の不自
由なものを捨て、置くもんかね、落ちてても枯れても長屋中、みんな江戸ツ子だ』
串削りと同じ鑄型の女に生れた瘡毒お六、

『按摩さん、今その親方のいふ通りだからね、贅六に構はず安心して、さツさこ稼ぎに出な
さい、稼いだ錢さへ用心すりやア、なアに其外に怖い事のない上方もンだよ、ホ、ホ、』

左右より味方を得て、俄かに杖の力こなりし按摩の與太郎、

『へエ、外に怖い事もないが、稼いだ錢に油斷のならない奴ですかい』
さうしても此盲目按摩の贅六太夫は、此まゝに無事に治まらぬ事こなりぬ、

森羅萬象の一塵一法も唯これ酒の外なき宗立坊、いかなる拍子の瓢箪は何をか感じけむ、い
よいよ今朝は此八軒長屋を立去る正念工夫、ふしぎに今まで賣飛さざりし懷中硯の塵を吹き
拂ひ、久しく乾きし秃筆の端を嚙で、消炭の如き墨色に猶更ら天生の大悪筆を現はしつゝ自
己が嗚の破障子へ白晝の寐言を書残しぬ、

來る時も法界より現じ、去る時もまた法界に歸す、這個の四大は虚空に一般、朕跡なく際涯なく突如こゝに飛散して行くところを知らず、

わざ／＼書残さずとも、さうせ行きごころの知れぬ奴、せめて其まゝ音なく飛散するかと思へば、這個の四大まづ贅六の疇を差覗いて、過日の遺恨を返しぬ、

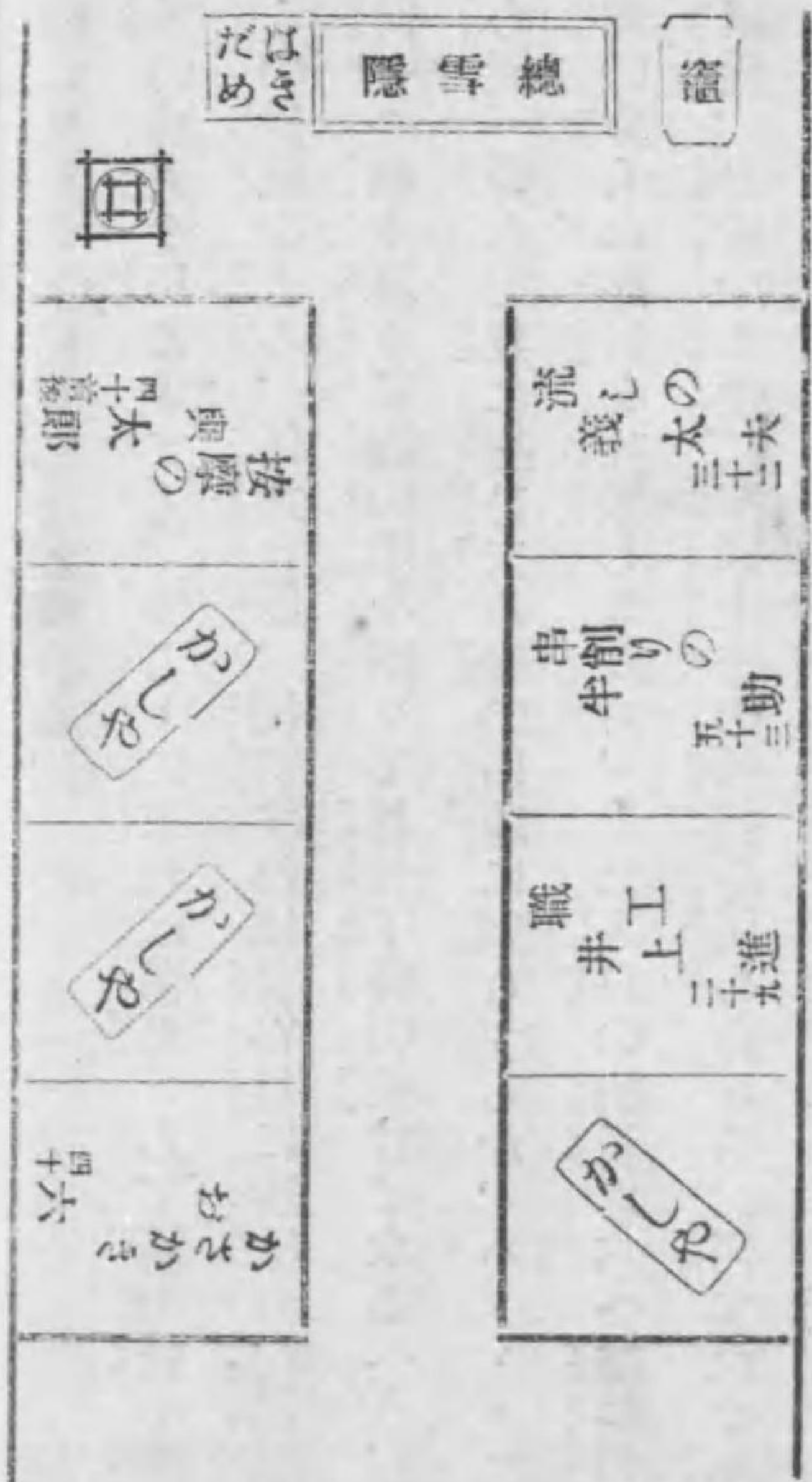
『汝元來慳貪邪惡の一塊物、常に陰魔こなつて專思寂想の我三昧を妨ぐるのみか、たまたま満して來た祖道徹底の我鐵鉢を覗うて、よくも執念深く夜あかしの附纏ふた、後で勘定すれば淨財一圓三十七錢六厘のうち汝のために半分は飲まれたぞ、もし猶いまだ飽かすんば咄々これを喰へ』

もはや立去る宗玄、禪杖を逆に取て障子越に突破れば、流石の贅六、あつこ驚いて片隅へ身を縮めし間に鄰屋の半助老爺を差覗きぬ、

『念々般若の功力を用るすとも、時こゝに來れば驀然として箭の弦を離るゝが如し、この宗玄、今この長屋を去る、任運自然、把定すれば雲谷口に横はり、放行すれば月寒潭に落つ、さるを何ぞや朝々暮々に鰻の串を削つて見性了義の扶けこなるべき、畢竟これ夢幻空華の細念、心機一轉して我に隨ひ去る底の田地に到らざるか、ハ、ハ、ハ、』

いよく譯の分らぬ寐言を吐散しながら、また入口の瘡毒お六へ捨鉢の返報、
『三世の諸佛、出世の本懐、醍醐上味の妙經を舐めながら、何すれど如來成道の直路なくして可憐ら顔面の瘡毒こなつたる、十方佛土の中に只これ一乘法あるのみぞ雖も、あはれむべし只これ一枚の張膏藥に如かざる法華の廣宣流布、恰かも跛鼈の天に向うて飛んこするが如しだ、知らずや大醫王も及ばざる我禪家の祖道は木人の腸も割き石女の髓をも敵

く、もし翻然として我に歸せば柳は緑、花は紅、忽ち本來の面目に癒してやるぞ』
 いちく／＼相手の返答せぬうちに飛出して、今日こそ最後の飛花落葉、さのみ風も吹かぬに何處にもなく散り失せぬ、



今まで何處に塙を定めしか、やう／＼昨日の朝、この八軒長屋へ住込で、まだ二日も立たぬ
 按摩の與太郎、はや今夜は杖を力に笛を吹いて立出でぬ、

白晝でも闇の世の中は負惜みの捨科白、實は馴れぬ土地を始めての探り足に、いつしか迷
 うて心の方角を取失ひ、同じ町を幾度か往きつ戻りつ考へながら、さて人に問うて恥にもな
 らぬ事を問はぬ奴、やはり其まゝ立往生もせず盲目滅法に探り歩き、五歩目には必ず見えぬ
 目を見張りて夜露に濕りし胸間聲、

『按摩上下、三百文』

いかに晝でも夜でも同じ身ながら、もはや更渡りて町は靜かに人も定まる十二時頃、いよいよ
 よ方角は分らず土地は知れず、腹は減る足は疲れる氣は焦る、加之も宵より叫び歩いて一軒
 の客もない疳癩まぎれに、此奴ます／＼自棄の大聲を張上げぬ、

「按摩上下三百文、あんまア上下で、三百文、だい畜生」

折しも彼方より流しの三味線、おもはず首を傾け耳を澄せば、次第に近づく糸の音色を幸ひ、流石の盲目根性も弱り果て、待受けながら聲をかけぬ、

「そこへ来なすつたは流しの師匠だね、歩を止めて済みませんが、ちよいと聞きたいんですよ、全體こゝア何處でしやう實は今夜、始めての稼ぎに深入り過ぎて、いやはや、さんざ迷ひ込だ、業平町へ歸るんですよ、業ア違つても同じ夜の家業だ、さうか足取の知れろ其邊まで、ちよいと出して貰ひたいもんですね」

「ハ、ハ、ハ、」

「笑ひ、ごつちやアないんですよ、此方に目はないが、ミンド酷い目に逢ひましたからね、猶更ら甲を失つて、さつぱり方角が取れない」

「ハ、ハ、ハ、」

「おや、何が、さう面白くつて、呵しいんですい、これほご頼んでるに何が、をかしいんだい、藝人のくせに人情のない無愛嬌な奴だぜ、ふざけるな、夜通し迷つたつて山中ちやアなし、市街中だ、いやなら嫌で頼まねエが何故、けらく笑やアがった」

「頼まんミ吐せば、わざく無理に手を引てもやらんが、こゝから業平町まで、よつほご遠いぞ」

聞くや否、按摩の與太郎、思はず杖に力を込めて身を支えながら、聲する方に飴細工の如く首を引伸しぬ、

「何だか聲の調子に、聞覚えのあるらしい奴だ」

「見覚えのある筈がないわい」

「や、道理で、この野郎、向側の上方もんだな」

「さやうで御坐い」

「同じ長屋の人に錢を用心しろこいはれたから、盗賊かと思つたに、はくあ、うぬア流しの義太夫だね」

「いかにも、日本一の名人太夫ぢや、持て生れた藝の力で他人の耳を奪うて腸も引抜くが、まだ錢を奪ひ取る稽古も修行も仕た事がない」

「ないか、あるかア汝のこつたが、よくも今夜ア人を馬鹿に仕やアがツた、きツミ禮をするぞ」

「それには及ばんが、するこいへば折角の芳志、うけてもやらうかい、ハ、ハ、ハ、しかし今夜は兎も角こゝで此まゝお別れ申しませう、いづれ否でも應でも互に顔を、おツミ、其方からは見られんわい、ハ、ハ、ハ、まアゆるく、ミ氣長う夜の明けけるまで、そこに居くされ、片輪を敵手に意地を張りたうもないが、素根性の曲けた、ご盲目ぢや」
其まゝ三味の音を止めて歩み出せば、按摩の與太郎、べろり舌を出しながら、そツミ足音を聞澄して、後より随ひ行きぬ、

長屋の奥の院、總雪隠より立出でし半助老爺、自己が塙にも入らず、其まゝ盲目按摩の宿を差覗きぬ、

「おい、按摩さん、與太さん、ごうしたんだい、昨夜、稼ぎに出たは宜いが、けふの今ごろまで、もう汝、午前だぜ、人は外貌によらねエ情婦のころへでも藻潜込で、うかく寝過ぎたんぢやアねエかな、この長屋へ来たばかりで、まだ日數も立たねエに、さう意氣筋

を遣られちやア恐れ入るね、ハ、ハ、ハ、

按摩の與太郎、によりり首ばかり破障子の外へ突出して、例の蠣に似たる右の目の玉を廻しながら、歪める唇端より蟹の如き泡を吹きぬ、

「親方、あの上方もんは昨夜、いつごろ歸つて來ましたね」

「あの野郎も昨夜は、さうしたか、よほご遅かつたよ、さうさね、一時を過ぎたらうぜ、いや、二時に近かつたかも知れねエ」

「今、さうしてますい」

「夜の二時ごろに歸つて來て何だか獨りで、くつくく笑つて居やアがツたが、曉方から寢込だこ見えて、ぐうぐう高野の眞ツ最中だ、寝ても起きても黙つて居れねエ野郎だよ」

「畜生、獨りで、くつくく笑つて居ましたかい、やア、親方、世間には随分、根性の曲つた奴

もあるが、あゝ念の入つた糞意地の悪い、人を馬鹿にした、ふざけた奴ア居ませんぜ」

「さうか、したのかい」

「さうも、かうも、いやはや、ミンだ酷い目に逢ひましたよ、實ア前夜、まだ呼吸の取れない始めての場所へ出たんでしやう、だから、つい方角を失つて、うかく迷ひ込で仕舞つた、いくら考へても歩いて、夜は更けるし人往來はなし、腹は減る足は草臥れる、ますます鈍痴つて、杖の突き場も分からなくなつたんですよ、さうころへ流しの義太夫三味線、野郎の稼業を聞いて置けば宜かつたに、まだ來て二日目の前夜ですもの、それを彼奴は猶更ら知りませんからね、わざく咬へて振られたやうなもんだ、さんざ馬鹿にされた新屋の果、さよならご吐して、この目の見えないものを夜露の立往生に捨てたまんま、うぬ一人で氣持よく歩き出したア親方、鬼でも出來る勢ぢやアありませんぜ」

「や、酷い事を仕やアがッたな、いくら何でも、そいつア長屋中で、うッちやッて置けねエ不人情だ」

「親方、まだ親方、そればかりぢやアないンですよ、口惜しくツても残念でも、其まゝ立往生して居られませんからね、仕方なしに後から、そツゞ野郎の足音に耳を澄して、ついで往ッたンですよ、ところが、いくら歩いても、歩いても、こゝへ歸れない筈だ親方、だしぬけに駈出しやアがッてね、はッミ思ツたが、もう無効さ、まんまご首尾よく野郎の術にかゞツて二度目の立往生、やうく夜が明けて人に聞くご本所の果も果、龜井戸の火葬場に近いンですもの、畜生、さんざ夜の夜中を引ッ張り廻した上、死だ後でなくツちやア川のない、あんな飛放れた場末へ置去に仕やアがッて、おまけに汝だけ先へ歸ッて来て、くつくつ獨りで笑ッたごは、親方、酷いにも何にも凡そ世の中に、あれほご悪太く出来た奴

ア、またご二人あるモンでしやうか、腹が立ッて、癩に觸ッて、みりみり骨が鳴ッて、全身に熱が出てるンですよ」

折しも向側より欠仲まじりに贅六の大聲、手に取る如し、

「目の開た人間でさへ、をりく水死があるに、あゝ運の強い奴ぢやなア、川へも陥らす無事に歸ッて来よッたらしいわい」

たゞ一口に職工といへど、實は職工の端くれにもなれぬ奴、十四五の小僧さへ器械場に彷徨て鼻の頭を黒くすれば、兎も角も飯の種を持って歸る世の中に、井上進といふ嚴めしき名を現はし髻面の目鏡を光せし大の男が、由來こゝに二十錢以上の日給を取つた事なしは、いかなる發明家も利用の出来ぬ廢物野郎、煙突より吹出す煤煙のやうな奴なり、

この廢物野郎が最も大切なる會社の勤務時間に唐突の大聲を發しながら、諸君よ諸君、わづか四百二十七萬圓の金さへあれば天下の諸君を彈丸にして現社會の根底を三日間に粉碎すべしと、例の主義を振廻せしたため、忽ち職長に引摺出されて工場の貯水池へ眞ッ倒さまに投込まれ、やうく這上るころを待受けし多勢に四方八方より踏倒され蹴飛ばされ、生命からがら全身濡鼠の如くなつて遁歸りぬ、

寢ても起きても唯これ著の身に著たまゝの古洋服一點、襦袢襦袢一枚の用意もなければ、流石に長屋の手前を憚かりつゝ自己が塙へ飛込むや否、あはれ折しも秋深き霜月の中旬頃、ぶるぶる震ひながら丸裸になつて蜘蛛の巢の如く糸目の透きし破れ股引を腰に纏うた髻目鏡、せめて其日の晴渡る天氣を僥倖、力まかせに雑巾の如く捻ぢて絞りし洋服を小脇に抱へつゝ、そろく屋根へ這上りぬ、

加之瓦屋根でなく、ほつ建小屋の板葺屋根、みしく鳴る音に、おもはず首を締め腰を軽く脚下を浮かしながら、まだ雫の滴る古洋服を兩の手に廣げて、長屋の外より差出でし柘榴の枯枝に引ッ懸けつゝ、自己もまた其處に其まゝ猫の如く躊躇りて日に曝されぬ、

往來の中央に捨て、置ても拾ひ手のない古洋服、わざく木の枝に乾し懸けて人に盗まるゝ恐なけれさ、下へ降りては寒さに堪らぬ本人、丸裸の膝小僧を抱て背骨を曝せば、秋の末ながら日中は案外の暖かさ、襦袢を纏うて火の氣もない塙の片隅に縮まるよりは天の賜もの、わけて小春日和の快晴に、うツこりこ心地よく、いつしか睡氣を催す折しも、ほごりこ背中に何やら落ちて冷たし、

はッ驚きながら、手を背後に差廻せば、べちやりこ指頭に白く柔かきもの、おもはず見上ぐれば一羽の鳥、飛去つて彼方の屋根より我を鳴る如く、あほうくこ二聲ばかり啼きぬ、

や、言語道斷、けしからん奴だ、鳥類の分際で人間も人間、天下の志士に對うて糞を放ツかけるこは、

石を拾うて抛付ける真似をすれど、高を括つて平氣に羽翼を收めながら、また一聲、あほうと啼出す面憎さ、片手を伸し片手を縮めて鐵砲の真似をすれば、ますます人を馬鹿にして嘴を横に振りながら、裸人形め何をするかといふ體に、もはや堪らず我を忘れし髻目鏡、疳癩まぎれの手足を一時に動かすや否、つるり踏こつて、あつと叫ぶ間もなく四百二十七萬圓の男一疋、この貧乏長屋の中央へ丸裸のまゝ轉け落ちぬ、

金といふ點に付ては、日給二十錢の身を以て四百二十七萬圓に向ひ、人間といふ點に付ては、忽ち職長に引摺出されて池に抛込まれ朋輩に蹴飛され、智恵といふ點に付ては、屋根の上より丸裸のまゝ手足を動かして烏と喧嘩する男、なかく恍けて面白く出來た奴なり、

されど本人の身に取ては、なかく恍けて居らぬ量見、たゞ洒落に面白くて烏と喧嘩した理由でなく、石を拾ふ真似も鐵砲の真似も此奴相應の藝を仕盡して、おもはず我を忘れし疳癩まぎれの脚下、真面目に踏こつて五體の中心を失ひ、兩側の廂の間より遠慮會釋もなく、ごたりご長屋の中央へ轉け落ちたる次第なり、

加之も此奴、まッ逆倒さまに落ちて腦天を打つや否、うんご其まゝ往生すれば寂滅爲樂、この上もない幸福なれど、あはれや火宅の運命いまだ盡きず、脚下より順に踏外して真ツ直に迂り落ちしかば、丸裸の尻骨を自己が五體の重量に叩き付けて、實は死より痛い目に逢ひぬ、猫が一疋、迂り落ちても長屋中の總出、この物音に驚いて左右兩側より飛出せば、例の髻目鏡が白晝の丸裸に腰が脱けて動けぬ體、たゞ頻りに首だけ振動かしぬ、

『やア長屋の諸君、失敬々々』

急に手は出さねぎ、第一番に損のない口を出す贅六、

『さうしたんぢやいな井上はン、雨でも人間でも上から下へ落ちたに不思議はないが寝ても起きても身に放した事のない古洋服を脱で、この晝日中に丸裸で、ハ、ハ、ハ、まさか井戸浚の夢を見るため、わざと屋根に這上って落ちた理由でもあるまいな』

串削りの半助老爺、これはまた口よりも手が先なり、

『黙ッてるい、この贅六め、うぬの出る幕ぢやアねエ、おい井上さん、理由は何でも宜いが、ぎツカ酷く打ちやア仕なかつたかね、ハ、脱けたかね、脱けちやア歩けめエ、ウンと氣張ッて、わッしの肩へ取ッ捉まった、そら其手で確乎と肩へ、兎も角も汝の堪まで運び込ん上だ』

『たゞ痛、有難いが頗る痛い、聊か腰骨に異状を來したやうだ、暫時このまま置いて貰ひ

たい』

『往來ぢやアなし、さう痛きやア無理に運ばなくツても宜いが、たゞ腰の脱けたばかりでないさすれば、こいつ困ツたねエ醫者を呼ぶに仕ても急に來やがるめエよ、呼だ事のねエ長屋だからな』

折しも向側の盲目按摩、

『いや、醫者に及ばンよ親方、杉山一流こゝにありだ』

なるほご八軒長屋に分相應の名醫、俄に藥罐頭を振立て、探り出でぬ、

『ごいだよ、ごいだよ、本人は何處に落ちてゐるんだ』

三日間に現社會を粉碎する四百二十七萬圓の井上進、やうく鰻の串を削ッて其日を送る半助老爺の肩に取纏りながら、自己が疇に昇ぎ込まれし後より續いて探り行く按摩の與太郎、

「ごこだよ、ごこだよ、ハ、ア入口から右側の二軒目だね、親方、本人は腰を脱したばかりで外に怪俄アないんですか、醫者には及ばんが全體、ごういふ工合に脱けて居ますかね」
「ごういふ工合に脱けてるか、そりやア汝が来て見りやア、いや、觸ッて見りやア直ぐ知れるだらう、兎も角も上ツて、早く療治してやんなせエ、よほご痛いやうだ、もし手後れになるご大變、それこそ眞實の醫者騷動だ」

「よろしい、杉山一流、なアに血の出る怪俄さへ無きやア、手が脱けても足が脱けても大丈夫、その場で揉直して見せるから安心して貰ひたい、しかし首が脱けて居ちやア困る、たしかに本人の胸へ著て居るんでしやうな、まだ首のない人間を療治した事がないからね親方」

目の見えねまぐせに、ふざける場合ちやアねエよ、杉山でも檜山でも宜いから早く療治し

てやんなせエ、乃公ア遣りかけた仕事があるからね、おい井上さん、また後で見舞に來るよ」

串削りの半助老爺、其まゝ立出でし後は、腰を脱した丸裸の髯目鏡に、そろく這寄る盲目按摩、八軒長屋の外では逆も見られぬ圖なり、

「ごりや、お見せなさい、なるほご、こいつだ、こゝだ、落ちた勢ひに自分の體量で、この骨を打ちなすつたんだね、ごころをかういふ鹽梅に」

「あ痛、たゞ痛、さう酷く遣ッちやア堪らない、そッご頼むよ」

「ごうせ少しは痛い」

「なか／＼少しではない、まるで腰骨を碎かれるやうだ、やア痛いく」

「ですがね、そッご撫でて居ちやア無効だ、これが杉山一流、つまり痛いのが療治のきく理

由だから、うんご堪忍して、堪忍さへすりやア、すぐに癒る筈だ、もし間違つたところで生命に別條はありませんよ』

『生命に、別條、あられて、堪らない、たまらない、痛い〜』

『さう痛けりやア腰を止して、肩の方を揉で見やう』

『肩を揉で腰が癒るかね』

『そこが即ち杉山一流、足の爪頭を揉でも頭痛が癒るくらだから、同じ背筋の肩を揉で腰は當然だ、實は臍を揉で耳の療治も出来るし鼻を掴んで脚氣病も癒せますよ、さうです、かういふ調子に肩を遣るこ、さのみ腰へ響かないでしやう、これで效能があるから妙だ』
『まだ效能は見えないが、直接に腰を揉まれるより痛く無くって好い心持だ、これで癒れば有難いね』

『癒るこも、たゞ痛くして癒せば一時間で済むところを、まア肩の方から心持よく療治するには、凡そ三日間、いや事に依るこ半月かゝるだらう』

『え、半月、半月、一時間ちやア考へもんだ、此ま、半月も腰が脱けて居て堪るもんか、苟くも天下八百萬の勞働者を一身に任する井上進、大に奮發して寧ろ一時間の痛い方に決心した、もし三十分で済めば、それに對する苦痛も忍ぶぞ、さア遣つてくれ』

世間に害を及ぼす傳染病の外、醫者の來る筈なければ、不安心ながら兎も角も按摩の與太に任して一まづ立去りし半助老爺、實は氣にかかりて其ま、捨てゝも置けず、また例の鳶鼻を動かしたつゝ出來りぬ。

『井上さん、少しやア宜いかね、さうだい腰の工合は』

「大丈夫だよ親方、心配に及ばない杉山一流だ」

「なアに汝に聞くンぢやアねエよ、本人に聞いてるんだ」

「だって親方、自分の容體が病人に分るもんかね、醫者に聞くのが當然だ」

「そりやア、さっだがね、上下三百文の醫者ぢやア少々、覺束ねエよ、手ツ取早く本人に聞く方が確だ、ハ、ハ、ハ、井上さん、まだ歩けねエかな」

足の爪頭を揉で頭痛を癒し鼻を掴んで脚氣病も癒すといふ、古今無類の杉山一流に盲目滅法の荒療治、あまりの痛さ寒さに丸裸の腕を組みながら、ぶる／＼震うて齒を咬しはる髻目鏡の井上進、さも苦しげに半助老爺の顔を見上げぬ、

「歩く、歩けないよりも、すく頗る手厳しい療治だ、まるで腰の骨を揉碎かれるやうだ、あ痛た／＼／＼」

「おい／＼、おい與太さん、ちよいと待ちねエ、いくら杉山一流でも、さう無闇に痛いミ／＼を揉ちやア却つて宜くならう、よほご本人が苦しうだぜ、第一また井上さん、いつまで何だつて、まッ裸體のまま震つてるんだよ、この薄寒いに腰の脱けた上、風でも引ちやア大變だ、例の洋服ア何處にあるんだね」

「や、その洋服、屋根の上」

「何、屋根の上」

「屋根の上へ乾しに上つて、それがために踏ハッたんだ」

「ハ、ア、さうかね、いや實ア、さういふ理由で、この晝日中に丸裸のまんま上から落ちて来たかと思つたよ、ハ、ハ、ハ、なるほご著替がねエから今日の天氣を幸ひ屋根の上で洋服も身體も同時に乾してたんだな、しかし井上さん、もう段々ミ脚が薄くなつて来たぜ、乃

公が取入れてやらう、なアに背は足らなくツても串にする丸竹の長エのがあるからね、雑作アねエよ』

半助老爺、まづ向側に身を寄せて足を爪立てながら、頻りに見上げぬ、

『おい井上さん、ごごご、ごの邊の見當になるんだ』

『この上の見當で、長屋の背後から出て居る柘榴の枝に』

『いや、ねエぜ、木も枝もあるが、乾した洋服ア見えねエぜ、もし風にでも散ツて仕舞ツた

ンぢやアあるめエか、屋根にもないやうだ』

聞くや否、これ無くては生涯丸裸の井上進、あツミ驚く拍子に脱けた腰骨、ひよこり立

ツて飛立す背後より盲目按摩の與太郎、其まゝ一生懸命に嚙り付いて吐鳴りぬ、

『さア立ツた、さア療治の效能が見えたぞ、杉山一流この通りだよ親方』

寝ても起きてても唯これ一著、そもく身に纏うて以來、いまだ會て肌を放した事もないに、

自然に離るゝ時節到來せしか、丸裸のまゝ人間は正しく屋根より此方へ這り落ちて残れぬ、

木の枝に乾せし古洋服は屋根より彼方へ行方も知れずなりぬ、

盗まれしか拾はれしか、いづれにせよ、この洋服一著を失へば、目鏡と猿股の外に赤裸々の

井上進、例の四百二十七萬圓は儲蓄で、もはや二十錢の日給さへ取りに出られぬ境涯、ぶる

ぶる震ひながら半泣の髯面に腕を組で、ごうせめなき思案に夕暮の向側より瘡毒お六の聲、

『井上さん、まアお氣の毒な事、ミンだ目に逢ひましたねエ、いくら杉山一流で腰は立ツて

も、著る衣類がなくツちやア嘸お困りでしやう』

井上進、いよく丸裸の身を固く縮めて髯面の目鏡越、今戸焼の土人形に似たり、

「實に困った、せめて夏なら兎も角も凌げるが、この寒空に向って殆ど進退これ谷ツた」

「さう裸體で極って仕舞はずに、ちよいと手軽く何さか、うまい工夫がないんですかね、いくら困ったにしろ、外へ稼ぎに出る男の身として、友達二人や三人はあるでしやう、誰か長屋の人を頼んで理由を言ッて貰へば、まさか捨てても置きますまいにさ」

「奈何せん、ちよいと今、さし當ッて、さういふ友達も工夫もないんだ、事ここに至ッては萬事休せり、流石の英雄も刀は折れ矢は盡きて、もはや策の出づるところを知らずだ」

「おや、まア、髻を生した大の男が、何さいふ意氣地ないこッてすよ、外の事なら随分、見えない振も出来るが、この長屋で女ア妾一人だ、著るものが無いッて、ぶるく丸裸に震ッてる人を見ても居れませんからね、著替の襦袢を一枚、あけませう」

著替の襦袢さいへぎ、實は本人の瘡毒お六さへ片隅へ丸めて捨置きし襦袢襦袢一枚、指頭に

抓んで差出せば、三日間に天下を覆へす四百二十七萬圓の裸武者、まだ痛みの残る中腰を浮かしながら、飢ゑたる猿の餌食を貰ふが如し、

「や、恐縮々々、正に是れ同情の極なるもんだ、韓信は漂母一飯の恩を忘れず、この僕もた決して今日を忘れない、必ず他日に於て大に報ゆるところある心算です、つまり僕一人に對する慈善は社會八百萬の勞働者に對する大慈善だ」

「くだらない文句は入りませんよ」

「や、恐縮々々」

せめて色白の小男ならば、襦袢にもせよ秋空の夕暮に女襦袢を纏ひし丸裸、あはれ質草の矢種も盡きて猶更ら彌増す下司女の情夫ごも見ゆれぎ、元來が生れついて人並を外れし骨太の大男、まッ黒の虎髻に半面を埋めて目鏡越の丸裸へ、地色の褪めし淺黄模様のメリンスミ

破れし更紗金巾の縫合せ、袖丈一尺四五寸、袖行一尺六寸、身人形の三四寸も開きし女褌袴を纏ひし體、襟は合はず胸は開いて腹の中央の臍を現はしつゝ、ぬつゝ手足を差出しながら仁王立の井上進、なるほぎ屋根の上で鴉を喧嘩する奴に出来たり、

されど本人さらに恥ぢも思はぬ顔色、寧ろ今日の窮状は却つて他日の我歴史に一種の光彩を放つべき覺悟、瘡毒お六に對うて頻に感謝の言葉を盡くしぬ、

「鳥でも獸でも生れたまゝで濟むが、この人間といふ不完全な動物だけは、さうも生れたまゝの丸裸で居れない、やはり世の中の多數決に制せられて、残念ながら何か身に纏はざるを得ない、ミころで長屋中の奴等、いづれも冷かなるこゝろ氷の如き中に、かく厚き同情を寄せられた貴女は實に仰ぐべき婦人です」

仰がれても見下されても平氣の瘡毒お六、例の長煙管に粉糞を詰込で、ぱつぱつ薄き煙の輪を

吹出しぬ、

「井上さん、ふざけちゃア困りますよ、この妾はね、生れてから人に貴女なんか、いはれた事のない女さ」

「いや、貴女です、實に貴女ご尊稱すべき價値がある、今日の貴夫人ご令嬢ごかいふものは、到るごころ家を外にして慈善の看板を持廻るが、なアに十中の八九、皆これ名譽ごいふ直接の交換物に對する競争だ、いまだ世に出でざる池中の蛟龍に對うて一片の情を傾けるものはない、その中に於ける貴女ア實に、實に仰ぐべき婦人です」

自己を池中の蛟龍にして、ますく饒舌立つれば、瘡毒お六、いよく蒼蠅けに顔を反けながらの笑ひ聲、

「ホ、何が何だか、さつぱり妾には分らないよ井上さん、しかし女の褌袴一枚で、まさ

か外へ稼ぎにも出られまいから、出られるやうになるまで、ごうですね、妾と同じやうにマツチの函でも張ッちやア、裸體で飢死するよりは増ですぜ、ねエ井上さん、ホ、、、」

「や、ますく、以て大に感謝せざるを得ない、實に貴女は、實に貴女は」

四百二十七萬圓の男、いよくマツチの函を張りさうなり、裂けても破れても丸裸でない申譯の古洋服を纏ひ、照ッても降ッても日々まッ黒に煙突の煤を浴びながら、あはれ二十錢の日給を取り兼ねし井上進、こゝに其古洋服を失うて其稼ぎにも出られぬ身となりては、もはや飢死するより外に智恵も工夫もない筈の奴なり、されど幸ひ向側の瘡毒お六に襦袢一枚を貰ひ、またマツチの函を張る内職まで授けられて、髯面の目鏡越しに感謝の涙を浮べつゝ、寧ろ窮して通ぜし量見、時に取ての藝能を心得し

一生懸命、教へられたるまゝ、神妙に傍目も觸らず、脚めぎも稼げども、元來が手先の至ッて無器用な奴、千個で七錢五厘のころを、やうく日に三百ほどの數、錢にして二錢二厘五毛、これでは芋の蒂も嚙れぬのみか、いよく目的の四百二十七萬圓に遠ざかりぬ、加之も出来上りの三百個を瘡毒お六に示せば、其うちより忽ち七十二個の仕損じを跳出されて餘すところ大の髯男が朝から晩までの稼ぎ高、わづかに二百二十八個のマツチとなりぬ、井上さん、まア何ごいふ無器用なこッたよ、まだ馴れない始めての手内職だから一日で三百の數は宜いが、その三百からかう屑を出しちやア困るね」

「や、及ぶかぎり注意して大に働いた覺悟だが」
「覺悟でも現在、これちやア汝さん、何にもならないよ、この七十二の屑を差引けば、二厘三毛だ」

『え、二厘三毛、堂々たる男兒が一日の力を盡して二厘三毛は驚いた、あまり残酷だ、いくら窮しても二厘三毛の日給では頗る心細い』

『おや、井上さん、その二厘三毛を汝さんの方へ取る勘定だね、それぢやア猶更ら間違ッてるよ』

『間違ッてる』

『間違ッてるさ、よく考へて御覽、千で七錢五厘だから三百で二錢二厘五毛だらう、さころを汝さんの出した屑が七十二、それを錢に見積ッて差引けば二厘三毛、此方へ取るんだよ』

『や、ますく、以て心細い』

『なアに妾の方が心細いさ、逆倒に吊ッて絞ッたッて人並に鼻血も出ない丸裸の相手だもの、その二厘三毛が取れるかね、つまり妾の引受になるんだよ』

利慾のためには石地蔵の胸倉も取る奴、自己に隙があッて損さへなくば、何事にも飛出して四邊かまはず悪洒落の贅六、髻目鏡か丸裸のまゝ屋根より下り落ちた時は無論の事、まッ先に踊り出して人の災難を面白半分、あれほどの悪まれ口を叩きながら、その髻目鏡が瘡毒お六に襪襦袢一枚を貰うてマツチの函を張り損ね、加之も大の男が一日の稼ぎ高二厘三毛を逆に取りられるさいふ珍事出来、うかく黙ッて其まゝ見遁すべき筈のない奴なり、

その贅六が不思議や其後さらに音なく、自己が塙に羽翼を縮めて嘴も出さぬは、此奴、ごうやら怪しい工合、何か仔細なうて叶はぬ筈さ、鄰家の半助老爺また人の事が氣にかゝる奴、例の鳶鼻を蠢めかして、そろく足音を忍ばせながら、表障子の破れ目より差覗きしが、やがて其まゝ再び足音を忍ばせつゝ淺瀬を渡る鷺の如く髻目鏡の塙へ取返しぬ、

「井上さん、おい井上さん、汝の洋服ア無くならねエぜ、あるよ、たしかに所在を見届けて来たよ」

マツチの函を張り損ねて以来、ほッミ猶更ら凹垂れて女の襦袢褌一枚に半泣の井上進、ぶるぶる震ひながら髻面を差出しぬ、

「な、何、僕の洋服が、あるッ、ごここにある」

「外ぢやアねエ、この長屋にあるンだ、正しく無事にあるぜ」

「や、平生は兎も角、人の窮に乗じて翻弄するモンでない、時に遭はず今かく丸裸でマツチの函を張り損ねるが、もし宿志の一端を得れば凡庸三伍をなすべき井上進でない」

「おい、井上さん、相手を見て物をいふが宜い、自分の仕事に追はれて急がしい生きた江戸ッ子だぜ、わざわざ暇を潰して用のねエ茫然した丸裸の髻ッ面を翻弄して何が面白いン

だ、現在その洋服があるから、あるご教へてやるに、もし眼前へ出りやア、さうするい」

「出れば有難い」

「それ見ろ、實アね、あの贅六、あの野郎が持つてるンだ、いくら上方根性にしろ、まさか盗んで銭になる品か品でねエか、そのくらゐの事ア分るだらうが、彼奴、あゝいふ人の悪い野郎さ、汝が屋根から這り落ちて腰を脱かした、ささくさ紛れに、そッミ引摺卸して祕しやアがツタンぜ」

聞くや否、井上進、半面の虎髻を逆立てながら、猛然として飛出す勢ひを、半助老爺、俄に差止めぬ、

「待った、ちよいご待った、いくら本人でも汝一人ぢやア面白くねエ、按摩ハ與太、彼奴も贅六に夜夜半を本所の果まで引ッ張り込まれた遺恨があるンだ、かういふ時に野郎、長屋

中の總がかりで、ぎゆうご占めてやりてエ、待ちな井上さん、乃至が今、うめエ謀略を考へ出すからね、なアに時の場合で事に依りやア、眞實の盜賊に落して仕舞って、この長屋を叩き出すんだ、さうしても、あの野郎を無事に置ちやア天下泰平でねエよ』

久しく人を馬鹿にして八軒長屋を我物ミせし贅六の運命、いよく危急存亡に差迫りぬ、

實は面白半分の内々そツミ髯目鏡の古洋服を祕せし贅六、吊戸棚より掴み出して、また何をか悪洒落の一工夫、折しも人の足音に、はツミ驚いて思はず自己が股の間へ捻込むや否、串削りの半助老爺、だしぬけの不意に表障子を引開け、ぬツミ無遠慮に首を差入れながら、じろく四邊を見廻し、びくく例の鳶鼻を動かしぬ、

『や、こゝだ、さうも變な臭氣がすると思つて、いちく長屋中を嗅で來たが、こゝだく』

四角な面に丸い目を剥いて、妙な腰付に怪しい身振の贅六、

『何ちや、臭氣がする、きのふ今日來た奴でもないに、狼狽て方角を失ひくさつたな、もし

悪い臭氣なら長屋の行當りで、眞正面にあるぞ』

『いくら平生は平生でも外のことちやアねエから、わざと謎をかけてやつたに、野郎、まだ生け太く、づうくしい事を吐すんだな』

『いけ太いか、いけ細いか知らんが、吐す口は私の専有ぢや、あかの他人の世話にはならんぜ』

『やい贅六、うぬア全體、あかの他人さいふ事を知つてるのか、親類でも縁者でもねエ自分の外ア、他人さいふ事を知つてるのかい』

『おほろけながら、存じて居りますわいな、へ、へ、へ、』

『ふざけるな、いつもの戯談ぢやア濟まねエぞ、この盗賊め』

『盗賊』

『やい、やい、さほけるない、あの髯目鏡の古洋服を畜生、たしかに見届けたぞ、さア、かうなりやア百年目だ、長屋中で袋叩きにした上、警察へ突出すから覺悟しろ』

贅六、わざと俄かの高笑ひ、股の間に捻込みし古洋服を掴み出して、ぶら／＼宙に振動かしぬ、

『ハ、ハ、ハ、これかいな、ぢやら／＼ミ、あほらしい、せめて一文にでもなる品なら兎も角、ハ、ハ、ハ、乞食の鼻拭にもならンがな』

『錢になつても、ならねエでも何故、他人の物を黙って取りやアがツた』

『そこが洒落ぢや』

『洒落に盗賊する奴があるけエ』

『いや、しかし親方』

『親方だ、こん畜生、ます／＼人を馬鹿に仕やツがツて』

『然らば大將』

半助老爺、もはや堪らず、癩癩まぎれの大聲を張上げぬ、

『盗賊だ／＼、さア長屋中へ出た、さろばうだ盗賊だ』

待兼ねて第一番に躍出したは本人の井上進、目鏡と髯の間より赤貝の如き口を開いて、瘡毒をお六に貫ひし例の褌袴も脱捨てながら丸裸の勢ひ、

『鼠賊いづれに居る、僕が捻り潰してくれろぞ、慷慨悲憤に堪へんわい』

向側より按摩の與太郎、また杖を力の盲目滅法に躍り出しぬ、

「親方、ごこだく盗賊ごに居やアがるんだ、通すご困るぜ」

「大丈夫、袋の鼠で逃しツこアねエ、この上方野郎だ」

「何、上方野郎だ、畜生、さアさうするか見ろ」

「やア與太さん、さう無闇に杖を振廻しちやア危ねエ、おい井上さん、汝が取られた本人だ、思ふ存分、ひッばたいた上で警察へ突出すが宜い、ぎゆうご占めてヤンなせエ」

二日越の丸裸にせられて無念骨髄に徹せし井上進、寒さご癩癩に五體ぶるく武者振ひの勢ひ、次團太を踏んで髯の中より目鏡を光らしぬ、

「やい、こら、そもくこの井上進を何ご心得てるんだ、苟も今日の社會に對して八百萬人の利害得失を背負ッてる人間だぞ、つまり僕の身に纏ッた一枚の洋服は則ち天下八百萬枚の代價に相當するんだ、また二日の丸裸は二八の千六百萬人を一時に剥いで取つたも同然

だ、この莫大なる巨額ご天地に容るべからざる重罪を以て論ずれば、たゞ刑法三百六十六條の二月以上四年以下では濟まん奴だ、まして同じ長屋に居ながら、言語道斷の曲物め、恐れ入ッて控へろ」

「おい、井上さん、恐れ入ッて控へさしちやアいけねエ、引ずり出して、たッ挫くんのだ」

「親方、髯さんは文句ばかり多くッて無効だ、目が見えなくッても上方野郎の二疋や二疋、退いた、そこ退いた」

「やアまた無鐵砲に振廻すよ、あ痛、乃公だぜ、味方だく」

さては此奴等、總がりに攻め寄せたりご見るや否、わざご猶更ら落著て、いよく平氣の顔色に空を嘯く贅六太夫、

「は、ア、平生の手並、一騎討では逆も叶はご諦めて來よッたな、いや道理ぢや、しかし

本人の裸武者から首に仕てこまさう、聞けば今、算盤球の化けて出たやうに八百萬さか千六百萬さか、えらい事を吐したが、雑巾の端にもならん襦袢洋服一枚、同じ長屋に住めばこそ汝を丸裸にする面白半分、洒落半分、一時ちよいと祝してやツたもの、あれが本氣の沙汰で人に盗まれたり拾はれたりする品と思つて居るのかい、あほんだら奴、朝から晩まで一生懸命に働いて二厘三毛を先方へ取られる汝の身體も同一で、屑屋を拜んで頼んでも無償では持つて歸つてくれん品ぢやぞ、それを盗んだこは、ハ、ハ、ハ、さア鳶鼻も鈍盲目も一塊肉になつて來い、警察も制札もあるもんか、そろそろ此長屋も飽て來て、實は此方から出てこまさうと思つて居たんぢや、幸ひの置土産に上方野郎一疋の腕を見せてくれるぞ、ハ、ハ、ハ、』

叩き賣つて一文にならぬ品でも、他人の所有を黙つて引摺込んだ以上、洒落では濟まぬ世の中たこひ拾ひ手のない襦袢洋服にせよ、本人に取ては、寢ても起きても唯これ一枚の身の皮、それを二日越の丸裸にしながら、面白かつたでは濟まぬ世の中、流石の贅六も動かぬ證據を押へられて、いよく八軒長屋を追立てられぬ、

この長屋の草分として前後に敵なかりし業突張、彼お虎婆々さへ實は此奴のために饒舌り倒されて無念の死際を早め、例の石作朝鮮髯の如きは伸したり縮めたり殆ど護謨人形に等しく扱はれ、その他の立替り入替りて來る奴いちく相手を取て甘く舐め來りし贅六が、今更ら盲目按摩串削り三髯目鏡の三人に攻落されて、おめく自己の城を引退くべき奴ならぬさ、もしやこ思ふ萬一の恐怖は、やはり最後の警察沙汰、これが何より以ての嫌さに残念ながら追立てられぬ、

されど此奴、なかく追立てられるこは吐さず、これ幸ひに追ン出てやるこの勢ひ、一挺の古三味線を肩にかけ、十册ばかりの五行本を懐中に入れ、四角な面に置手拭、洗ひ曝しの著流しに色の褪めた紺足袋、齒の缺けた日和下駄を軽く踏鳴して、久しく住みし長屋中への置土産、今日を名残に思ふ存分、ねちちこ毒吐きぬ、

『さア、いよく以て今月今日唯今、お立ち遊ばすぞ、全體この長屋に私の居たのは明月の雲がくれ、草叢の球玉、わざと暫し光輝を包んで世を忍ぶ日本一の太夫ごも知らず、たゞの夜流し藝人ご心得て、恐れ多くも勿體なくも平氣に軒を並べて來た汝等、ようまア不思議罰もやらん事ぢや、いや現在に當らないでも自然の應報で名人を粗末にした天罰、いづれ半歳か一年のうちには、きつこ來るぞよ、その時に思ひ知り居れ、しかし考へて見るまこの私が身に取ても半歳か一年のうちに思ひ知られざる難義があるわい、そりや外でも

ない、實は今まで人間界に遠ざかつた此長屋に住めばこそ、何事もなく無事に濟だが、いよいよあらためて世の中へ出るごすれば、浮雲を破つた明月、草叢を飛出した名玉、ぼつご元來の光が一時に四方八方へ輝いて、わい／＼世間からは蒼蠅く騒がれる、勿論、同業者からは嫉まれる妬まれる、ごしく弟子ごもが聞傳へて押寄せる、ぎやア／＼ご女ごもに取巻かれる、さア事ぢや、うかくするご生命が危ふい、なかく油斷が出来んわい、ハ、ハ、思へば運の悪い何故まア音曲の司も司、その道の名人に生れたやら、生涯この口に鰻は食はいでも、せめて串削りになるか、杉山流は儲置、杉箸一本の杖を力に盲目按摩ごなるか、但しは瘡毒に襪襦襦一枚を貰うて一日の差引勘定に二厘三毛のマッチを張損ねるやうな、太平至極な髯面になれば宜かつたもの、惜しい事を仕て退けた、ハ、ハ、吐すだけの事を吐せば、一時も早く出て一錢たりごも稼ぐ氣の贅六、久しく住馴れし自己が

時も見返らず、一挺の三味線を肩に日和下駄の音、からころこ其まゝ立去りぬ、



自己一人の家賃さへ満足に拂ひし事なれど、住込で以來この八軒長屋を我物顔に振舞ひ、

誰彼なしの相手を馬鹿にして、遺憾なく無遠慮に上方根性のあるかぎり發揮せし流石の贅六も、悪洒落の運命こゝに盡きて古三味線一挺を肩にしながら、襤褸洋服一枚のために追立てられ、いよゝ何處にもなく行きぬ、

贅六の立去る後影を見送りて、頻に鳶鼻を捻る半助老爺、

「怨敵退散、久しく業をした厄病神も出て仕舞って、當分まづ天下泰平だあの野郎一疋で、

さのくれエ長屋中を騒がしやアがったか、上方もんの生づうくしい太エ奴には懲りたよ、

ちよいと何か事がありやア、すぐ搦み付て、手にも足にも終へねエ野郎だつたぜ、ハ、ハ、

二日越の丸裸にマッチの函を張損ねて、殆ど半死の如く凹垂れし髻目鏡も、また再び元の古

洋服を纏うて俄かに冴返りし勢ひ、

「盗めども郷黨を犯さず鄰人を窺はず言ッて、いくら無情の兇賊でも自己の居村や近處へ

は決して禍を及ぼさないもんだ、然るに彼奴、近處も近處、同じ長屋で、一軒置た鄰屋の僕を丸裸にするこは、や、實に暴戾殘忍の極、けしからん世物だ、のみならず由來この長屋の圓満を亂す奴、いつも彼奴にありこすれば猶更ら以て捨置けん理由だ』

按摩の與太は首を伸し口を歪め例の蠅に似たる片目を剝出しながら、舌鼓もろこも杖の端に調子を取て、こつ／＼と軒下の泥溝板を打鳴しぬ、

『いけないよ井上さん、何だね、今こなツて捨置けるも置ないもあるもんか、本人の汝さんさへ根強く確乎して居りやア、あの上方野郎、あゝ無事に出られる筈の奴ぢやアないんだぜ井上さん、大變な勢ひで吐鳴出したア宜かつたが、すぐ其言下から拜むやうに半泣の弱い音を吐て、さうか君、助けるこ思ツて僕の洋服を返してくれば、あまり人が善過ぎたね、ハ、ハ、また親方も親方だ、さこへ出て相手が悪事をした奴で此方は目の見えない人

間だ、いくら疵が付ても大丈夫これ幸ひに、この杖で畜生、めちやく／＼に叩き擲ツてやらうこ思ツたに、いや危ねエミか何ミか、いふもんだから野郎ます／＼高を括ツて、すきな熱を吹きやアがツたぜ、殘念な事をしたよ』

瘡毒お六、自己が疇より居坐のまゝ身を捻りて破障子の外へ首を差出しぬ、

『まア宜いぢやアないか、兎も角も油に水の交ツたやうな、あの上方さへ出りやア當分この長屋に事は起らないよ、しかし八軒の中、かう四軒も空屋が出来ちやア何だか淋しいね、せめて一人ぐらゐ、さうだらう、氣の利た罪のない面白い苦勞人の果でも來さうなもんだね』

折しも烏打帽を面深に戴ける二十七八の瘦男、職人でなし書生でなし外へ稼ぎに出る勞働者でなし、いづれ日蔭の産物、青白く血の氣のない面に勢力のない目鼻を置並べて、あるか無

さかの薄き短かき疎髯を口の兩端に願の先に引しながら、ふわ／＼と音もなく入来りしが、繪絹の裱ばかり五六枚分を肩にかけ、夜具がはりの古毛布と共に何かは知らず太古新聞に巻きしものを背負ひ、これを生命の繪具皿十枚ばかりに大小の書筆、幾本も硯を携へし體、瘡毒お六の所謂る氣の利た罪のない面白い苦勞人の果でなく、今日の世のりに所する美術家と稱して、甚だ氣の利かない其くせ至つて罪の深い面白味も浅い苦勞も修業も足らざる生若い初心の駈出し畫工なり、

實は世間へ出て人並に飯が食へないため、泣く／＼とこゝへ落ちて來ましたと、そこまで正直に白狀せすとも、せめて暫く修行のためにか當分まづ世に賣らすと、何にか斯かか自己の業に應じた體裁上、さのみ聞苦しくない自慢の仕やうもあるべきに、今この八軒長屋へ流れ

込みし生若い生嚙りの生畫師、ひよろり青白い日影の瓢箪面に似合はず、吐す事だけは天晴れ古今を空うせし一大畫伯の量見、油紙に火の燃付くが如く風音を立て、饒舌出しぬ、

『長屋の諸君に挨拶かた／＼一應、この僕の來歴と意見の大略を發表して置きます、俗吏の擁せる戸籍面には新潟縣十族で谷口潜記入されてあるが、苟くも世界の美術家に一地方族籍や姓名の必用がないから、つまり我を天より使命しられたる自然の稱に於て、眞美といふ諸名の外、呼で貫ひたくない、また僕は二十七の今日まで、この美術のため、學校に這入つたり師匠に就たり或は先輩に導かれたといふが如き不見識な不自由な馬鹿々々しい無用の鑄型に製造された事は一日もない、目に觸れて心に映じ筆に隨ふ天地の森羅萬象は皆これ其まゝ直に取つて以て遺憾なく學び來つた僕である、しかし今人に比して聊か參考とするに足る古人の畫だけは他山の石で、をり／＼一顧の榮を與へてやツたが、まづ支那

の部では多く墨畫の山水に捨難い面白味がある、所謂る彼等の稱する畫神の六法、氣韻生動、骨法用筆、應物象形、隨類賦彩、經營位置、傳模移寫といふが如き點は支那の奴に限る、また所謂る彼等の十二忌で、布置迫塞、遠近不分、山無氣脈、水無源流、境無夷險、路無出入、石止一面、樹少四枝、人物僵儻、樓閣錯雜、滯淡失宜、點染無法といふが如き病處は常に恐れて最も能く避けて居るやうだから、山水の妙は多少、彼の墨畫に認めてやつたよ、また我日本の古畫中にも天曆年間の飛鳥部、天永年間の信貞、宅磨では爲氏に爲成、永治の爲遠、文治の爲久、巨勢では仁和の金岡、延喜天元の公忠公持、寛弘の基光ミ光親、春日の祖に出た隆能、住吉の門を開いた慶恩、土佐では寛元の經隆、貞和の光顯、永和の行廣、弘安の長隆に明德の光重、嘉吉の光弘、永正の光信、寧ろ世間で喧ましい光則や光起を僕は取らない、釋門の畫としては弘法慈覺智證は偕置、珍海行海、賢

慶勝尊嚴信の輩より妙澤祖淳金剛佛子の徒に至るまで、随分、ちよいと見るに足るべき奴はあるが、やはり山門阿闍梨の覺超ミ惠心僧都ミ烏羽僧正の類に一種の趣味がある、周文雪舟、秋月の邊も兆殿司啓書記の邊も物に依ては悪くない、狩野家の元信、探幽、守景、その他に於て俵屋宗達、尾形光琳、岩佐又兵衛、英一蝶、菱川師宣、西川祐信、歌麿、北齋、容齋こゝ等も百中の二三點は僕の目を惹いた事がある、應舉、景文、豊彦、乃至また竹田だの華山だの文晁だのさいふ手合も強ち一喝し去るに忍びない點はあるが、つまり概して以上は只これ僕の一顧に價するのみで、わざ／＼取て以て學ぶべきところは少しもない既に古來の東洋畫家を斯の如く列舉し來つて僕の眼中、一の印影を止むるものなしとすれば勢ひ、これから西洋畫の方を一通り見てやる覺悟だが、やはり僕としては殆ど取るに足るまいよ、ハ、ハ、ハ、さうしても僕は直接に畫神の祕命を受けて、古今東西の美術界に新な

「一大紀元を起すべき責任があるらしいわい、」
これが今この八軒長屋へ落ち來りし日蔭の瓢箪面、谷口眞美といふ二十七八の平凡畫工が口
より出でたる言葉なり、

古今東西を空うして人間の師にも就かず先輩にも導かれず、筆は天地の森羅萬象に同化し心
は畫神の祕命に接觸せしこいふ谷口眞美、背骨より羽翼が生て大空へ飛去るかと思へば、今
この八軒長屋へ氣の脱けし風船玉の如く、ふわ／＼と落來りて瘡毒お六に對ひし右側の入口、
八卦よい屋ミ石作の古巢に音もなく納まりぬ、
きのふ始めて長屋中への挨拶に、千年以來の畫家を列擧し來りて一山百文に叩き付けたる大
氣焔、さらに何が何やら分らねど、持込みし道具ミ言葉の端々に畫工といふ事だけは承知せ

し半助老爺、ソツと破障子の穴より差覗けば、なるほご硯を引寄せ筆を舐めて唐紙に對ひつ
つ頻に小首を捻る工合、まさか親類縁者へ金の無心手紙を書くやうでもなし、
『御免なせエよ』

障子を開けて首を差込めば、おもむろに振返る谷口眞美、蒼白い瓢箪面に淋しき一種の微笑
を浮べぬ、

『さア、そこに立たずとも這入ッて宜しい、這入りなさい、まだ筆を下さないから談話も出
來るよ』

『なアに這入らなくツても宜うがすよ、しかし汝さん、畫を描きなさるんだね、この長屋へ
今まで随分、いろんな人間も來たが畫工は始めてだ、全體さういふ畫を描くんです』
たゞ單に畫工といはれ、全體さういふ畫を描くんです』
問はれて、世界の大家藝術家、大に面

白からぬ顔色、暫し無言のまま空を嘯きしが、また俄かに笑ひ出しぬ、

「ハ、ハ、ハ、さういふ、畫を描くか、ギンな畫工か、兎も角も出来たものを見れば自然に分るよ、見る奴に畫心がないから分るまいさいふ今日の丹青家はつまり筆の端で物體の輪廓ばかりを摸寫するがためだ、既に匠氣を脱した大善美の神髓には、鬼畜も雖も感化し得られる筈だ、まして同じ人間なら盲目にでも見せる事が出来るよ」

「へエ、ふしぎだね、汝さんの描く畫は盲目でも見えるかね」

「そこが所謂る神來の筆と言つてね、恐ろしいもんだよ」

「ちやア幸ひ、この長屋に按摩の與太さいふ盲目滅法な奴が居るからね、何か汝さん、ちよ

いご描て御覽なせエ、その與太に見せてやらう」

流石の谷口眞美も聊か驚いて、はッと思ひしが、また靜かに首肯きぬ、

「いや盲目にも種々の區別があるよ、目が盲して居ても心の盲して居らない奴がある、また目の盲と共に心まで盲して居る奴がある、ところで僕の今いふ盲目は前者に屬するもんだ、つまり目が見えなくつても心の見える盲目だよ、その與太なるものは全體、ミツちの盲目だ、心眼ごもに盲して居ては無効だよ」

實は山國の片田舎を乞食半分に渡り歩く旅畫師にさへ、逆も企て及ばざる谷口眞美、人里では場末の軒端に吊下るペンキ塗の煙草屋看板も眞似の出来ぬ奴ながら、吐す事は天晴れ古今獨歩の大畫伯なり、

また世の一口に彼奴は下手ちやこいふ、其下手は修業次第で上手になるべき道筋なれど、ここに此奴は生涯このまゝ修業の道も筋もなく、あはれや下手になるだけの見込もない奴なが

ら、本人の勢ひは畫神の秘命をうけし世界の美術家、いよく我靈筆を揮へば盲目の眼中にも明白に映すべしと吐しぬ、

加之も此大畫伯、ここで貰うて来たか拾うて来たか、尺三寸五の枠ばかり四本もあれど、絹は卑近俗惡なりとて一枚の繪絹も持たず、筆勢墨色は紙にありて、その枠に土佐唐紙を張付け、いかなる密畫の大作物やら、わざと丁寧に礬水を引て、蠅が燈心を捧ぐる如く、こわくこれを大切に軒下へ持出し、幸ひ廂と廂の間より漏れ来る薄き日影をうけて、そこ破障子の外へ音もなく立掛けながら、自己は内に入りつゝ乾ける筆と刷毛を筆洗に濕ほし繪具皿を置並べ硯の墨を磨流す體、さては此奴、いよく何か描出す量見なり、折しも按摩の與太郎、もはや此ころは長屋の呼吸を呑込で、杖も入らぬといふ大膽な足取、奥より盲目滅法に歩み來りて思はず泥溝板の端に躓つき、よろしく横に倒れかゝりし途端、

枠に張付けたる土佐唐紙まだ生乾きの中央へ狼狽た藥罐頭、ぶつり突ッ込や否、きやツミ叫んで其まゝ夢中に躍り出しぬ、

『やア誰れだく何を仕やアがる』

かく見て我を忘れし谷口眞美、青瓢箪に似たる面を眞ッ赤にして追廻せば、猶更ら恐れて夢中に遁廻る盲目の大聲、半助老爺まづ第一番に飛出しぬ、

『何だくさうしたんだい、おいく畫工さん侍ちなさい相手は目の見えないもんだよ』

『いや目が見えても見えなくツても僕の關するところでない、折角この僕が枠に張ツて礬水を引て將に神來の筆を揮はンとする其、その大切な紙を頭で突破るは不埒千萬な奴だ』
『ハ、ア畫を描くために張ツた紙だね、しかし不埒でも何でも破れた以上、もう仕様がねエよ、いくら盲目滅法にしろ、わざと頭で突破ツた理由ぢやアなし、また汝さんもだ、それ

ほご大切な紙を外へ出して置たのが善くねエさ、こりやア乃公が兎も角、この場を貰った事にするからね、相方、氣を悪く仕ちやア不可よ、おい與太さん、謝罪るに及ばねエが何か一言、ちよいと挨拶するが宜いぜ』

『親方、挨拶も挨拶だが、驚いたね、實に驚いたよ、枠に張って畫を描く紙たア知らないからね、おまけに濕してあつたらう、よろ／＼倒れかゝった拍子に何だか、べちやりミ顔へ當って、づほりミ頭が這入って、ひいやりミ首筋へ觸るかと思へば四角な細い堅いものが身體へ取つついたからね、や、驚いたの驚かないのって親方、實ア三年の生命を縮めたよ、ハ、ハ、ハ、』

いよくこの一大書伯、その熟筆を揮へば盲目の眼中にも映すべき證據歴然、まだ描かぬうちに素頭を紙背へ徹しさせて三年の生命を縮めぬ、

俗悪にせよ卑近にせよ、もし二挺の繪絹ならば、あれほご容易く按摩の首も這入るまいに、なまなか筆勢墨色は紙にありきて、實は一枚の絹代で一月も食へぬ奴、おまけに二枚ごない土佐唐紙を枠に張付けしのみか、わざ／＼馨水まで引きし大切の生乾きを盲目滅法に突破られて、さらぬも日陰の青瓢箪に似たる谷口眞美、ます／＼青く細長く凹垂れて悄氣返りぬ、向側の瘡毒お六、マッチの函の山越に片手を伸して障子を引開けながら、居座のまゝ眞正面より半笑ひの聲、

『こんだ事でしたね、いくら目が見えないにしろ、馴れた長屋の中だから足取の呼吸で分りさうなもんだに、そゝつかしい按摩だよねエ、ホ、ハ、ハ、しかし汝さんまだ相手が、あれで僥倖さ、も少し早く来るこ上方うまれで糞意地の張った惡洒落な奴が居たからね、それこ

そ大變だ、逆も梓に張った白い紙、突破るぐらゐの生やさしい事ぢやア治まらないよ、まづ汝さんに一生懸命の畫を描かして置いて、いよく出来上ったさいふ時分に何か、きつこ取返しが出来ない罪の深い思ひ切った業をする奴さ、加之も後で謝まるやうな奴でなかつたね、それから其奴の得手で、ねち／＼根氣よく隙に明して逆捻の屁理窟を捏出すんだもの、堪忍がなくなつて氣の短い江戸ッ子は猶更ら、いくら山國の辛抱強い相手でも、まゐらされるよ、ホ、ホ、ホ、

目の見えぬ按摩の荒療治にさへ殆ど半泣の谷口眞美、ますます恐れて青くなりぬ。

「實に驚いた長屋だ、さういふ人間が居るごすれば、一日も安心して筆を執る事が出来ない、そも／＼美術家といふものは他の技藝家と違つて世の中に於ける高尚優雅の極、これ以上あるべからざる貴重の天賦を帯びてゐるからね、なほ念のため聞いて置きたいが、その上方も

ンの外、今まだ残つてゐる連中で第一番の人間に用心すれば宜いんだ」

「なアに汝さん、もう用心するやうな怪しい物騒な人間は一人も居ませんよ、あの按摩だつて、わざ／＼好き好んで演つた藝當ぢやアなし、筋向ふの親方は、あの通り氣心の知れた、さつぱりした苦勞人の果で、その鄰屋に居る襤褸洋服の化物こそ少々うす氣味の悪い人相で、まツ黒な髯ツ面に目鏡越の白い眼を剝出してゐる工合、いかにも油斷のならないやうだがね、案外あれで罪のない奥底の見え透た、お人よしさ、ホ、ホ、ホ、まア汝さん安心して、お描きなさい、だが今日あの按摩に破られた大きな紙へ一枚描いて、幾何になるんです、また精を出して日に何枚ほご仕上りますよ、妾のマツチを張るよりやア、ごうせ少しは割の宜いモンでしやうね、しかし親方の串には逆も叶ひますまいよ、あの親方ア汝さん大體の腕があるんだから、さのみ稼がないやうでも日平均に十錢づゝは缺かさず取れるんだも

の、長屋中での高頭さ』

自己の畫を以て天下の不換金物と心得たる谷口眞美、一日に何枚ほご描けるに問はれしのみか、マツチの函より鈔からず鰻の串より多からざる價格に論じられて、おもはず兩眼の涙、ほろ／＼と流しぬ、

襤褸洋服の化物めいて薄氣味の悪い人相、まッ黒な髻ツ面に目鏡越の白い眼球を剝出して工合、いかにも油斷のならないやうだが案外あれで罪のない奥底の見え透た、お人よしに出て来るよご、瘡毒お六のために名譽の適評を蒙りし井上進、そろ／＼壁越の破れ穴より鄰屋の谷口眞美に向うて人間相應の談話を仕かけ出しぬ、

天下八百萬の勞働者を肩に荷うて四百二十七萬圓を目的としながら、朝から晩まで一生懸命

の丸裸にマツチの函を張って二厘三毛を先方へ取られるといふ髻目鏡、古今東西を空うせし大美術家として畫神の祕命をうけながら、土佐唐紙一枚を盲目按摩に突破られて忽ち半泣の青瓢箪、人格さしい見識さしい世間これほご似合の朋友なく、壁一重の双方より至極お目出たい交際を結びぬ、

「君、君、谷口君、さうですな、いくら伎倆があつても俗中の俗たる、かういふ長屋ちやア氣が散ッて思ふやうに畫が描ケンでしやう、逆も後世に遺すべき大作は出来ませないな」
「や、井上君ですか、なアに美術家に時も境も處もない、山を仰いで山を寫し水に臨んで流れを畫くが尋常一般の片々たる小畫工さ、苟くも何等か物質外に接觸して僕如きは手で畫かない、これを形に求めず言ッて、つまり心で描くからね、ハ、ハ、ハ、」
「なるほご、その君にして始めて物に煩はされず、この陋巷の九尺一間に晏如たりだね、實

は僕も唯これ徒らに營々として日給を取るための職工でない、大々的の主義を抱負を持つて居るんだが、いはゆる時いまだ到らず、暫時ここに機を待ちつゝあるのさ、尺蠖の屈するが如く、蟄する蟲の繭に潜めるが如しだ」

『お互に大器晩成だね』

『無論、眼前の小利害に關すべき我々でないから、かうして居れるもの、さもなくて君、馬鹿々々しい、この長屋の奴等と眞面目に伍をなせるかね』

『眞實だね、ハ、ハ、ハ』

『時に谷口君、事實この長屋にあるべからざる君と僕が、ふしぎに兩々相並んで名を没し腕を押へながら、わざと殊更に斯く潜匿するといふは多少、時運の然らしむるころもあるが、寧ろ却つて面白いね、たしかに他日の一話として誇るべきことだぜ、さうだ君、紀

念のため、僕の肖像畫を描てくれないか』

『描かう、大に描かう、描かれる君より描く僕よりも、今この八軒長屋といふ畫の成る場處が面白い、後世いづれの何者が手に落ちて珍藏されるか知らないが、つまり一の面白い立志談の歴史が伴つて行く理由だから、いよく以て尊いぜ願くは、一個人の所有にしたくないね、尠くも公衆の仰ぎ見るべきころへ掲げたいもんだ』

『そりやア君、さうせ、さうなるよ』

いよく、壁越の相談こゝに整うて、青瓢箪が髯目鏡の肖像畫を描く事となりぬ、

繪端書といふ一種の傳染病が天下に流行せし時、田舎行の五枚一組を大枚金四錢の潤筆料に引受けて、日に三組十五枚分の十二錢を取りしが生涯一度の運に向ふた全盛期、以來いまだ

曾て實は人に頼まれし事なき谷口眞美も、徳は孤ならず鄰家の髻目鏡に肖像畫を望まれて、これぞ我ための知己を得たる量見、いよく壁際に摺寄りぬ、

「随分これまで世に聞えた諸方の紳士富豪から、いろくの手蔓を求めて頻りに依頼された事もあるが、聊か感ずるころあつて畫料の高きに關せず相手の親疎に、顧みず中には折角の紹介人を怒らしてまで一切これを謝絶して來た僕だ、しかし君のためには描かう、大に描かう、全體この美術家といふものは、賤しき金錢上の賣買物となつたり、また人爵の上より動かされて筆を執るべきものでないが、奈何せん當世の奴等、皆これ利益の反映物となつて日備取の如くに稼ぎ出すから困るよ、ハ、ハ、ハ、つまり他日大成の天職を帯びたる谷口眞美が彼等ミ類を同うするに忍びず、わざミ殊更ら現在の窮乏に甘んじて修養する所以だ」

「や、有難いね、實は僕も今こそかうだが、他日の井上進、大に期するところのある人間だから、もし君をして尋常一般の畫工ならしめば、決して頼まないよ、ハ、ハ、ハ、」

「固よりさ、無論、その點があればこそ互に心持よく双方の意志が自然に一致した理由だ、このころで肖像は半身かね全身かね」
「ミツちが宜いか、そこは君の自由に任すから、僕は只これ君の畫中に入れば希望、足れりだよ」

「なるほご、ぢやア半身に仕やう、ごうも肖像畫としての全身は面白くない、また半身にしても眞正面は甚だ趣味に乏しい、やはり横の方が宜いね、聊か斜めに向たところを、あまり密畫でなく、あまり細畫でなく、寫眞めかず油繪めかず、水彩畫にならず鉛筆畫にならず、また猥りに線を現はさず影を用ゐず、そこは谷口眞美、多年の苦心慘憺に得たるところ」

ろだ、一管の毛筆を以て生けるが如く書き出さう、兎も角も君、壁越では不可、こゝへ来て貰ひたい、まづ最初、ちよいと君の輪廓だけを寫して見るよ』

描く奴も描く奴なれば描かれる奴も描かれる奴、のこゝ本氣の汰沙に自己の時を這出す髯目鏡、美濃紙一枚の皺を伸して禿筆の端を舐めながら眞面目に待受ける青瓢箪、いかなる名畫が出来るやら、

『さア君、描くよ』

髯目鏡の井上進、此奴また本氣の汰沙に描かれる量見、カラもネクタイもない襤褸洋服一枚の素肌を掻合せながら、聊か反身の眞正面に肩を怒らしぬ、

『これで宜いかね君』

『いや、もう少し横の方を、あまり正面すぎるよ』

『このくらゐで、ごうだ』

『いけない、それぢやア君、また横を向き過ぎるよ、首を曲げずに其まゝ一分ばかり元へ戻して』

『元の方角を忘れた、ぎつちへ戻すんだ左か、右か』

『左、左だ、いやさ君の左ぢやアない僕の左へ、つまり君の右だよ』

『かうかね』

『さうだ、まづ顔の位置だけは戻ったが、まだ首が曲ツてるね、少々ばかり首を右へ立直して』

『これで宜からう』

『右だよ、右の方へだ』

「右だから僕の左ちやアないか」

「なアに今度は君の右だよ、つまり僕に向ッて左へ立直すんだ」

「ハ、ハ、いちくく相呼になッて困る、ぢやア斯うか」

「おツミ、よし、そこだ、そこだよ、動いては不可ぜ」

「なかく苦しい、早く頼むよ」

「暫時だ、暫時の間、さうして堪忍すれば、すぐに出来るよ、運筆自在、そら、早いだらう、そら鼻だ、しかし君の鼻ア特別に大きいね、殆ど顔面の三分一を占めてるよ、や、眉、目鏡、口、ほしやくくミ、これが髻だ、がさくくミ、これが頭の毛だ、さア出来たぜ」

「ありがたい、出来たかね」

「出来たミも、まるで生けるが如しだ、さうだい井上君、これが一本の毛筆で咄嗟の間に出

来たものご見えるかね、畫神の祕命に接觸せりこいふよりは、寧ろ畫神これ我なりこいふ僕の言に對して恐らく一點の批評を挿む餘地はあるまい、もし鏡があれば多言を要せず、本人の君に對照させたいよ」

「いや、久しく鏡に對ッた事はないが、む、これが僕の肖像かなア、憐むべし昔日の美少年かういふ變な面になッて仕舞ッたかなア、勿論、多年の失意落魄で社會へ對して不平滿々の割合、この身體へ少しの慈養物も慰藉も與へないからね、生理の上、さうせ容貌も自然に衰へたには相違なからうが、あまり残酷に衰へ過ぎてゐるね實は今まで、かう
を失

して居るやうごは思はなかつたよ、これちやア君、まるで斗の化物だな」

「斗でも何でも奈何せん、事實ありのままの直射反映で、それが現在に於ける君の肖像だ、かりそめにも美術家の天職に不自然の人工を加へる筈はないからね、まして君、わざ

わざ本人の君を眼前に置いて神聖に描たんだぜ、毛髪けつの一端たんも猥みだりに筆ふでを下くだしてない、實じつに生いけるが如ごとしだよ』

『さア、その生いけるが如ごとしで、これだからね、猶なほ更さらら以もつて心細こころほそくなつたよ、しかし君、毛髪けつの一端たんも猥みだりに筆ふでを下くださないといふが、この口髻くちひげの毛けの工わざ合あは頗すこぶる麁あら略りやくだな、ばかに手荒てあらいぜ、小兒こどもが墨すみを捺なす摺すつたやうだ、第一だいいちまた君、さうしたのか僕ぼくの目めがないよ、いやに鼻はなの穴あなが馬鹿ばか大おほきく薄黒うすくろくつて肝心かんじんの眼球めのかまがないぜ、たゞ目鏡めがねの縁ふちばかり丁寧ていねいに細こく描かてあるぢやアないか』

『そこだ、そこに大なる理由りゆうがあるんだよ、全體ぜんたいこの僕ぼくは古人こじんの畫法えわはふ一切さいを排はいして新あらたに將來らいの指導者しどうしやとなり模範者もはんしやとなる覺悟かくごだから、斷たんじて過去くわこの美術家びじゆつかに一顧この榮わいも與あたへないが、ちよいと興きように乗じりて素養そやうの深ふかい僕ぼくの伎倆ぎりやうを示しめて見たみたのさ、まづ最初さいしよ、ぐるりこ横よこなく

の二筆ふでに口髻くちひげの毛けを描かいたのは、つまり巧緻こうちせ織細せんごを避さけた文人畫ぶんじんがの筆法びつはふで、鼻はなは四條家しじうけの寫生風しやせいふうに土佐家とさけの重おもみ浮世繪うきよえの輕かろい粹すみを現あらはしたのみならず、實際じつさい、君きみの鼻はなは見苦みくるしいほご大おほきいよ、また唇端くちは最もつも遠とほい質朴しつぽくな古畫こがわより割出わりだして聊いさか狩野家かののけの趣味おもひを添そべたがわざこ顔かほの輪廓りんかくに鮮明せんめいな描線べうせんを用もちるざるは寫真しやしんと油繪あぶらえから脱化だつくわし來きたつたので、眉まゆと耳みみの多た少せう、さほけた工わざ合あは鳥羽繪とりはえの滑稽こつげいを帶おびてゐるが、案外あんぐわいまた素人しらうとの知しらないところところに雄大ゆうだいなる光琳風くわりんふうも加味かみしてゐるよ、その他たの一點てん一劃いつくわくいちちく、皆みなこれ容易そういならん由來ゆらいも出處しゅつしよがあるぜ、加か之しも以上いじやうの諸流諸派しよりうしよはを自由自在じゆいじゆいの筆端ひつたんに宿やして混化こんくわ圓熟えんじゆく、さららに少すこしも痕あとを止とめない僕ぼくの手腕しゆわん、さうだね、恐おそろしいもんだらう、しかし單たんに古人こじんの筆法ひつはふばかり興味きやうみ的に綜合そうごふしても面白おもしろくないから、こゝさいふ大切たいせつな點てんだけは他日たじつの畫神えわしんたる僕ぼくの精妙せいめうを注そいで置おいた、それが即すなはち其肖像畫そのしやうざうがわに白しろく眼玉めたまの脱ぬけた所以ゆゑんだ、全體ぜんたい、君きみの目鏡めがねは無色透明むしよくとうめいでない、ほつ

ミガラス玉の曇つたところへ外部の光線ばかり強く受けてるから、内部の眼球が實際あるか無いか少しも分らない、かるが故に目鏡の縁だけを二重輪廓の丁寧に描たのさ、今いふ通り僕は決して無用の細工に筆を加へたり不現實の空想を逞しうするやうな虚飾的の畫工でないからな、ありのまゝに直視直寫の神髓、その眼球の白く脱出したところが尊いのだ、君の肖像畫に於ける生命だよ』

眼球を引抜かれて尻のやうな畫論を聞かされし井上進、さう狼狽て何を感じたか、頻りに首を打振りぬ、

『なるほご、む、餅屋は餅屋で、さういふ深い理由があるんだね、や、いかにも君は斯道の一大革命者になれるよ、たしかになれるだけの手腕ミ議論を持つてるからねエ』

この廣い自由自在の世の中を遁擧うて、この狭い八軒長屋の九尺一間に追詰らるゝ奴は、ごぶ泥の底に沈みし一般、もはや再び引上げて洗ひ晒しの出来ぬ廢棄物、いづれ用のない人間の屑ばかりと思ひの外、いかなる無残の風に吹送られて今こゝへ散り來りしやら、一日の午後、まだ年若き色白に身も姿も賤しからぬ書生風の優男一人、そツミ四邊を物めづらしけに見廻しながら入來りぬ、

書生風は書生風なれど、下宿屋住居の書生風でなく、本薩摩の荒き飛白糸織に長き丸打の絹紐を寛く結び下け、同じ立飛口の綿入に英吉利ネルの單衣を重ね、縮緬絞りの兵兒帶に騎兵形の銀鎖を巻付け、まだ新しき鼠色の中折帽子、桐の柁目の直履に裏白の紺足袋、右に縞毛布で旅行川の中靴を重ねに携へ、左に細き棕櫚のステツキを輕けに杖つき、教育は確實に高等の二字を冠せられし學校程度、いづれ親は人に知られし中流以上の子弟、年齢の割合に萬

事まだ浮世馴れぬ風采態度は賤しからぬ家庭に育ちし證據、すらりこ背は高くはつきりこせし目鼻立、うまれついで美男なれど、あまりに美男過ぎて皮膚の色あまりに白く、あまりに優し過ぎて手足の筋肉あまりに力なく、あまり青年の活氣を失ひ過ぎて五體の調子あまりに勢なく、ごこに直接これいふ疾病ありこは見えねど、身體の虛弱に伴ふ意志の薄弱、當世かゝる色白の優形は絶えず一種の煩悶病に襲はれて、物に驚き易く感じ易き神經過敏の結果、自己のシャツ一枚を自己の働きに産出す道は知らずとも、案外おそろしき人生問題を手に輕に惹起して、うかくすれば名所舊跡の瀧壺を探しさうなり、

されど今この青年はまだ瀧壺も探し歩かず、同じ狼狽ながらも生命無事に八軒長屋へ入來りしは、せめてもの親孝行、きよろ／＼四邊を見廻して、まづ入口の瘡毒お六を破障子の外より差覗きぬ、

「甚だ失敬ですが、この奥の空屋を借りるには、ごこへ應へて宜しいのですか」

聞馴れぬ聲にマッチの手を止めて眼前の障子を引開けしが、丁寧に帽を脱がれて俄かの會釋もろこも、じろ／＼訝かし氣に青年の顔を見上げぬ、

「大家は、この長屋を出た横町にいますかね、なアに照つても降つても日家賃を取りに來るんですから、わざ／＼應へなくつても這入つてさへ居りやア、それで宜いんですよ、しかし、さういふ方が、お借りなさるんですの」

「僕です、私が借りたいのです」

「おや、貴君が、ホ、、逆も貴君なんかの住めるごころぢやアありませんよ、御覽の通り三方は板張付で入口に雨戸もない破れ障子の九尺一間ですよ、第一また這處へ住む人間は這處へ住むやうに出來てるんですからね」

「いや、是非も借りたのです、今のお話では、すぐ此まゝ借りて這入ッても差支ない
ンですわね」

「そりや、貴君、御本人さへ承知なればですが、お止なされば宜いにさ、二日こは居れませ
ンよ」

「ありがたう、だが、いよく借りる事に致します」

静かに振り返りて長屋の外を差招けば、これは案外まだ十八九の畫ける如き廂髪、加之も猶更
ら以て此長屋に飛放れし不似合の令嬢風、さては一人旅の瀧壺探しでなく、二人づれの愛こ
愛、此ごろ流行る自然派の小説的實行者に近き香あり、

もし今この青年一人ならば、當時流行の空想と煩悶に可憐ら脳味噌を喰潰されて、遺憾なく
心の病的を自白せし神經質の容貌、さうしても瀧壺へ近づくべき筈の危険物ながら、警察の

保護力よりも父兄の搜索力よりも更に大なる戀の力、この曲線の人體美に引止められしがた
め、やうく小説の口繪式に生残りて今こゝへ流れ来りし顔色、ありくも現はれぬ、

されど本人同士は最も進歩せる新思想の美果として、たゞひ舊思想の父母に許されずとも、
これぞ互に眞心を戀の神に許されたる蜜月旅行と思へばこそ、まだ世に馴れぬ青年の口よ
り案外こればかりは恥かし氣もない調子、頻りに手をもて長屋の外を差招きぬ、

「よろしいよ、かまはずに這入ッて宜いんですよ、幸ひ三軒も空屋があるさうだから」

流石に其まゝ暫し入兼ねしが、やがて左右の兩側に心を置きながら、風なきに花の散來るが
如く、伏目勝の足早に身を運び込みし姿情さひひ容貌さひひ、いかにも此青年の配合に調和
して、到るごころ横行濶歩せる世間普通の鰻茶式部でなく、たゞの女學生でないだけに猶更
ら痛々しく此長屋へは不似合の令嬢風、されど當時かゝる中流以上の令嬢風に却ッて斯る恐

ろしき理想實行の大膽は宿れり、
 ふツくりと豊なる薄紅の肉は、その中に包める骨ありとも見えす、眞白き額に廂髪の艶やかさ、頸首の毛際に自然の青味を帯びて、ほツミ作らぬ太き眉毛に無量の愛を含み、いきいきと張切る目元に今は身の仇となりし才氣を湛へ、丹花の唇端を固く閉ぢて、名畫も及ばぬ下願の凛々しさ、紋縮緬の被布に小荒き矢飛白の平お召、紫紺の袴を裾長く無難作に穿ちながら、ちらと見ゆる靴の踵の危ふさも慣れて一入の風情を添へ、左の指に眩き寶石の光輝、ますく薄闇き長屋の破障子に照返しぬ、

『貴君、こゝなの』

『暫時だから、しかし氣に入らなければ外へ』

『貴君さへ、よければ妾さへでも、よくツてよ』

『ちやア當分、こゝに極めるこしてね』

鬼と蛇で駈落者が舞込で來ても驚かぬ筈の瘡毒お六、あまりの案外に其後の口さへ聞けず、たゞ呆れて無言のまま、打守れば、向側の障子穴より差覗く神來の美術家も魂ひ飛で氣が遠くなりし體、その隣屋の髻目鏡は頻りに自己の肖像畫を見詰めて何さやら無常を感じし體、串削りの半助老爺は腕を組で首を捻り、盲目按摩の與太までバイオレットの香氣に鼻を蠢かしぬ、

*
 *
 *
 *
 *
 *

竈	總雪隱	だばめ
三葉 松原	三葉 原田	三葉 原田
助五十三	助五十三	助五十三
進二十九	進二十九	進二十九
美七	美七	美七
八軒長屋	八軒長屋	八軒長屋
八軒長屋	八軒長屋	八軒長屋
八軒長屋	八軒長屋	八軒長屋
八軒長屋	八軒長屋	八軒長屋

名譽に財産に生命を願ひる戀は虚偽の戀にして、いまだ神聖の戀にあらず、眞の愛は天地間
いかなる絶大の力にも犯されずして、人間いかなる犠牲物を供するも更に惜からずいふ、

この恐ろしく物凄き當時流行の危険病に取付かれて、あはれや今この八軒長屋へ流れ込みし
青春の男女、男は松川薫にて當年二十四の色白優形、女は原田三子にて子三芳紀正に十九の令
嬢風、象牙細工の雛人形に似たり、

この雛人形は右俣に奥の一軒目、あの贅六の立去りし空巢へ入りしが、壁一重の隣屋は串削
りの半助老爺、昔氣質の江戸ッ子に入らざる意地もあれど、また現在この男女を見るに見兼
ねて何さやら痛々しき心地、嵐に花を惜むが如く立寄りながら例の鳶鼻を捻りぬ、

『御免なせエよ、お邪魔しても宜うがすかね』

流石に女の原田三子思はず影に潜み、障子を開けて顔を出すは男の松川薫、

『決して差支ありません、何か御用で御座いますか』

『なアに別段、用なして、ちよいと唯、お交際かたぐいお話しに出ましたのさ、だしぬけに、

こんな事を言ッちやアお氣に觸るかア知りませんが、時に貴君方ア全體、さうして、かういふ場所の違ッたところへ來なすツたんですよ、いづれ何か理由のあるこッてしやうが、あんまり方角か違ひ過ぎてるやうだ、ハ、ハ、ハ、悪い事ア言ひませんからね、一日も早く出た方が、お爲になりさうだ、まさか人殺犯も放火盜賊も居ませんがね、此長屋ア此長屋の外に行きごころのねエ人間ばかりで連も満足な親御や親類を持つた人の住で居れる長屋ぢやアねエンですよ、お見受け申しやア男女ごも、まだ世の中の苦勞さいふものを御存じあるめエし、お年齢は若し御容貌は美し、萬事の状態が痛々しくッてならねエ、いくら時節ご身分が違ッたにしろ、やはり同じ道で随分この老爺も昔日、わけエ少壯にはね、さんざ好きな事を仕盡して無分別のありッたけを遣ッて來たもんですよ、まんざらの野暮でもねエから、杓子定規を當て、生木を割くやうな事アいひませんが、よッく氣を落著けて、お

考へなすツた方が宜からう、わざ／＼かういふごころへ落込で來なくッても、も少し外に相應の落伸場處がありさうなもんですねエ、ぶしつけながら打明けて一通り、そも／＼の最初から言ッて聞かして御覽なせエ、事ご品に依りやア昔ミツた杵柄で、お力にならないごも限らねエ老爺ですぜ、かうして隣り合ッたも、何かの御縁だ、實ア今までの罪障消滅に若い方の揉れ合ッた、お世話を仕て見たいんでさアね、ハ、ハ、ハ、」

縁は異なるもの味なものさいふ芒尾花の道行を戀の極意ご心得たる舊思想の半助老爺、愛は善美の極にして如何なる場所にも汚さるべき筈でなしさいふ新思想の戀に對うて、まだ一言も相手の口を聞かぬうち、はや自己ばかり獨り承知の胸に呑込で頼りに徹の生た通を振時けば殆ど迷惑の松川薫おもはず眉を擧めながら、その老婆心に對する會釋、されご我理想ごして天地俯仰に恥ぢざる愛の美を説出しぬ、

「御親切は實に感謝しますが、我々は決して、さういふ淺薄な卑近な希望ご理由の下に成立ツた一時的の幻影ではありません、つまり眞の愛ご愛ごの結晶體で、人生の最も清い最も尊い崇高の目的を遺憾なく實行しつゝあるものです、全體この愛の結晶體、この戀なるものは戀以外の何物にも左右さるべきものでない、所謂人間の絶對美で、たゞひ人の妻を姦するごも人の妻たるがために戀そのものゝ神聖を損ふべきものでない、さういふくらんですまして、我々は他の妻にあらず他の良人にあらず、互ひに清淨無垢の男女が虚偽なき眞の愛に依て斯くなつたものですから、多少、舊思想の不自然なる家庭眼より見て擯斥されるかも知れませんが、頑迷なる人爲的を遠く高く離れた神様に守られて居ります、その神様に許された美に對しては少しも疚しくありません、實は寧ろ心に誇つて居るのです、もし萬一この戀を遂げ得られないごすれば、もはや人間としての零です、生きて居て無意味

の我々ですが、もし萬一この戀を遂げ得らるゝためには生涯、いかなる苦痛も忍びます、いかなる煩悶にも堪へます、いかなる犠牲を提供しても敢へ厭ひません、しかし我々に寄せられた貴老の御好意は厚く受けます、たゞ同情の根底に違つたごころがありますから、遺憾ながら已むを得ず、お言葉に反いて此まゝ暫時、ある期限まで這處に居る決心です」

半助老爺、何が何やら更に分らず、二三度も例の鳶鼻を捻つて、また饒舌出しぬ、
「空に引ツ張ツた針鐵が物をいふ世の中だから、無理もねエが、さうも今時の若エ方ア、いやに難かしい口ばかり達者で困るよ、いくら何だツて馬鹿々々しい、たゞひ摺小木に羽が生て飛ぶにしろ、昔から極り切つた戀の道に變りがあるもんかね、鬼餓の五六疋も放り出した貧乏世帯の腐れ縁でねエ以上、まさか嫌で添へるもんぢアなし、つまり早い談話が互に嬉しく好て惚合ツて、さうなつたんでしやう、して見りやア、文句も糸瓜もねエ管だ、

やはり龜の甲より年の効で、小三十年も遠うの昔、さんざ仕上げて来た此老爺のいふ事を、お聞きなせエよ、悪い事ア言はねエ』

『その點は實に有難く、あくまで感謝しますがね、今いふ通りの主義で、奈何せん戀の成立に付て、戀の根底に付て、殆ど兩極端に分れてますから』

『なアに分れなくつても宜いさ、折角、さうなツたんだもの、出来た事ア仕方がねエ、今更ら野暮に改まって分れるにも及ばねエから、骨が無けりやア一體になる覺悟で、思ふ存分、氣の遠くなるまで吸付くも抱合うも宜いさ、無論、手に手を取て驅出すこいふ意氣筋は猶更ら結構だがね、唯この長屋へ汝さん方の身分にして落ちて来るなア、よくないよ、あんまり方角が違ひ過ぎるこいふ事さ、たこひ一時の足溜りに仕る腰かけに仕る、もし探し出された曉は、せめて申譯の立つ場所に居なくツちやア拙いよ、遂ける戀も情も居處に依て

思はねエ變な風の吹き廻しで、妙な工合になる事のあるもんだからね、身に垢の付かねエ今のうち早く出なせエ、こゝア人間の屑の捨場所だ、始めて世に出た初心の戀路で迎も長く辛抱の出来る筈アねエ、第一この長屋ちやア人目に立ッて、すぐ取ッ捉まるよ、今が今こいふでもねエが、よく考へてね、かういふところに一日も居らねエ分別が善うがすよ、入らざる他人の事に餘計な世話だが、壁一重隣屋で白髪の交ツた老爺が、さんざ苦勞を仕盡して来た甲斐もなく、黙ッて居ちやア濟まねエ』

理想は低くとも頭腦は古くとも、見るに見兼ねて心の底に嘘のない一片の俠氣、其まゝ自己が堪へ入りながら、また壁越に聲をかけぬ、

『くごいやうだが、よく考へてね、こゝを早く出なせエよ、さう見ても痛々しくツて置きたくねエ男女だ』

路傍の石に躓いて轉びし三歳兒を抱起す心地、見るに見兼ねて隣屋の半助老爺、頻りに言葉
を盡せし甲斐もなく、はや既に療治の届かぬ不治の難病、熱に浮かされて理由の分らぬ戀の
講釋を仕出せば、流石の江戸ツ子氣質も思はず歎聲を漏しぬ、

『智恵のある馬鹿に阿爺は困り果、なるほ昔の川柳、うまい事を言ツたよ、今時の生若い
奴等にやア、うかく手も付けられぬエ』

戀を曲物に心得たる舊思想の老爺が、戀を神聖に仰ける新思想の當世に向うて手も足も付け
られぬ筈なり、この松川薫が此長屋へ落ち來りし時、重げに携へし旅行用の中靴には、せめ
て男女の著替でも入れてあるかと思へば、底から口まで一ぱいに張裂けるほごの戀愛小説、
みツしりこ詰込で、そもくこれが身に附纏ふ病神ながら、本人のためには名譽よりも財産

よりも大切の寶物、これなくば、一日も生きて居れぬといふ生命の露、家庭にも宿らず學校
にも宿らず唯この小説に宿りて、清く高き美の神に觸れたといへば、實は氣が觸れて何をす
るやら前途の知れぬ危険物なり、

壁一重に白髪頭の半助老爺、まづ呆れて恐れて手を引けば、長屋中いづれも目を敬てながら
二の句を次で出るものなく、按摩の與太は唯これ鳥賊に似たる耳ばかり敬て、向側より痾走
ツた聲、

『親方、花の散て來る里でもない此長屋へ、さうした風の吹き廻しか、大變な人品の善い年
の若い意氣筋が流れ込で來たさうだね、實ア近來、いくら吐鳴ツて歩いても杉山一流、錢
にならなくツて困ツてますよ、幸ひ手近で、さういふ相手を客にしたいもんだな』

『いかねエよ、無効だよ、名のある醫者でも首を捻ツて匙を投げさうだ、連も汝なんかの揉